

平成19年度

第5回鳥取県総合芸術文化祭

評 価 報 告 書

鳥取県総合芸術文化祭評価委員会

はじめに

平成 14 年に「第 17 回国民文化祭」を開催した鳥取県は、これを一過性のものとせず、県民が日常的に文化芸術に親しむ契機にしようと「文化立県」を目指した。具体的には、県民の主体的な文化活動を尊重しつつ、行政は定性目標や助成制度、さらに全国でも希な専門家や県民など内外による評価制度を設けて、芸術文化の実践の方向を見定める環境整備を図ってきた。

第 5 回を迎えた「鳥取県総合芸術文化祭」は、県内市町村や鳥取県文化団体連合会などの参加を得て平成 19 年秋に行われ、着実な歩みを示しつつある。

今回行われたのは、鳥取県総合芸術文化祭実行委員会が主催した 中部地区での「プロジェクト事業」が 1 事業、 西部地区・東部地区の県民企画による「県民企画アートチャレンジ事業」が 6 事業、 参加体験型の「ワークショップ・フリースペースイベント事業」が 3 地域 80 プログラム、 実行委員会以外の主催事業が「鳥取県美術展覧会」「郷土の民俗芸能大会」「鳥取県青少年郷土芸能の祭典」「鳥取県出身のアーティストによるコンサート」の 4 事業、そして総合芸術文化祭の開催趣旨に賛同した参加事業が 153 事業であった。

特に注目されたのは、次の催しの動向である。 中部地区の県立倉吉未来中心で開かれたプロジェクト事業『倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～』の成果はどうか、 西部地区で前回まで行われた「朝日座」事業はどのように継承されたか、 東部地区ではこれまでの経験を踏まえてどのような企画が練られたのか。

「文化立県」は県民自らのものであり、現代に生きるものの権利として、つまりは社会に関わることによって開かれた文化政策に位置付けられている。従って公共政策の一環であるこれらの事業は公的支援の対象となり、多くの県民の賛同を得ているわけである。それだけに総合芸術文化祭は、納税者である県民に対して透明な運営を推進し、情報公開などの説明責任を果たさなければならない。全国でも先駆的な内外の評価制度は、これらの観点に立って進められたものである。

評価は「鳥取県総合芸術文化祭の基本方針」に基づいて行われ、鳥取県総合芸術文化祭実行委員会に報告書として提出される。評価報告書の改善点に対しては、これまで実行委員会で誠意のある対応がとられてきたが、さらに適切な対応で議論が活発化し、鳥取文化のレベルアップが図られることを期待する。

平成 20 年 3 月

鳥取県総合芸術文化祭評価委員会

座長 角秋 勝治

目 次

はじめに

総合評価	・・・	1
鳥取県総合芸術文化祭の概要		
1 第5回鳥取県総合芸術文化祭の実施結果	・・・	7
2 評価の実施概要	・・・	8
自己評価	・・・	11
観客・実施者アンケート		
1 観客アンケート	・・・	12
2 実施者アンケート	・・・	17
事業別評価		
1 倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～	・・・	20
2 88フォトモ	・・・	21
3 K I H A C H I 祭り i n 米子	・・・	22
4 ミュージカル「雪の女王」	・・・	23
5 鳥取サンバ	・・・	24
6 鳥取オペラ・ルネサンス	・・・	25
7 邦楽風土記	・・・	26
8 鳥取県青少年郷土芸能の祭典2007	・・・	27
9 鳥取県出身のアーティストによるコンサート こどもの楽園	・・・	28
10 西部地区ワークショップ・フリースペースイベント	・・・	30
11 中部地区ワークショップ・フリースペースイベント	・・・	31
12 東部地区ワークショップ・フリースペースイベント	・・・	33
専門家評価		
1 倉吉・ダブルストーリー【第1部】淀屋の世界	・・・	36
2 倉吉・ダブルストーリー【第2部】八賢士の世界	・・・	38
3 K I H A C H I 祭り i n 米子、88フォトモ	・・・	40
4 鳥取オペラ・ルネサンス	・・・	43
5 鳥取県青少年郷土芸能の祭典2007	・・・	45
6 鳥取県出身のアーティストによるコンサート こどもの楽園	・・・	48
鳥取県総合芸術文化祭評価委員会 委員名簿 / 評価委員会の開催状況	・・・	53
鳥取県総合芸術文化祭評価委員会 設置要綱	・・・	54

(別冊) 第5回鳥取県総合芸術文化祭評価報告書《資料編》

総合評価

第5回「鳥取県総合芸術文化祭」は、平成19年9月15日開幕の「鳥取県美術展覧会」を皮切りに、11月30日まで県内各地で行われた。総合評価の項目は次の通りである

昨年度の第4回総合芸術文化祭評価報告書で指摘された事項に対する改善点

本年度の第5回総合芸術文化祭の評価方法について

本年度の第5回総合芸術文化祭の総合評価

今年度の展望と課題

主な事業の評価対象は次の通りである 中部地区・倉吉未来中心でのプロジェクト事業『倉吉・ダブルストーリー』など 西部地区・米子の「ポスト朝日座」は、どのように継承されたのか 東部地区・鳥取はこれまでの経験を踏まえてどのような催しがあったのか。

1 昨年度第4回「鳥取県総合芸術文化祭」報告書で指摘された課題と改善点

鳥取県総合芸術文化祭（以下「総芸祭」という）の基本方針（中長期計画）のもとに進められた総芸祭は、3年間の創成期を経て、5年目の今回は「成長期」の2年目に当たる。その前の4年間を踏まえて、前回指摘された課題を要約すれば次の通りである。

「成長期」に入った作品のレベルアップはどうか。

県民の自由で自主的な芸術文化活動が尊重されているか。

指導者の養成も含めて、各種の環境整備は進んでいるか。

総芸祭の開催方法と時期の見直しについて。

アートマネジメント力の育成と醸成について。

納税者にとっても有益な催しが行われたか。

いずれも短期間で達成するのは困難な課題だが、総芸祭を価値あるものにし、継続してレベルアップを図るためには避けて通れないことばかりである。これらの課題は早急に成果が見えるものではないが、年々の積み重ねで実行すべき目標であろう。

例えば『倉吉・ダブルストーリー』は、邦楽と講談、あるいは音楽と朗読（ドラマリーディング）という創意工夫の組み立てで新鮮な舞台となった。出演者・スタッフ・地元の結束もあり、マスコミの協力も得て広報もかなり行き渡り、内容も一定のレベルに達することができた。舞台を支えるスタッフの意識や姿勢が地元の共感を得て客席も盛り上がり、納税者が納得するためにも協働関係がいかに大切かを改めて認識させた。

開催時期については、多くの県民が「秋の芸術文化祭」として楽しむ一方で、「催し物が重なり、見たいものや聴きたいものに行けない」というアンケートもあった。総芸祭を集中的にするか、拡散的にするか。いずれも一長一短あるが、いま一度根本に振り返り大胆な論議をする必要がある。

開催方法については、昨年度西部地区からスタートしたプロジェクト事業が今回中部地区で実施され、今回は東部地区で予定されているなど、「大規模プロジェクト方式」が確立されている。県民企画の「県民企画アートチャレンジ事業」も設けられ、企画にとって最も重要な「アートマネジメント力」をこうした機会に醸成することが期待される。しかし、企画、運営、公開まで、全体を把握し、適切な指示判断が要求されるアートマネージャーの育成には、豊富な経験と決断力が要求され、多くの課題が横たわっているのも事実である。

総芸祭を県民の主体的な活動にするためには、主要スタッフや出演者ばかりではなく、より多くの自主参加やボランティアが望まれる。その意味では実行委員やボランティアの公募がすでに実施されているが、総芸祭発展のために、より多くの参加が望まれるのは言うまでもない。

2 本年度第5回「鳥取県総合芸術文化祭」の評価方法

総芸祭の評価は、基本方針に定める次の定性目標のもとに行われる。

鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信する。

文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促す。

次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図る。

県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図る。

定性目標を達成するには、評価 - 点検 - 見直しが粘り強く行わなければならない。その評価によって、公的資金を活用した総芸祭の存在意義を明らかにし、よりレベルアップした作品の提供と効率的な運営で、成果と課題を明確にすることが求められる。

評価は一定期間の統一したデータが必要なために、従来の方が踏襲された。ただし、この評価方法も絶対的なものではなく、相応のデータが蓄積されたのちは、さらに効率的な方法が検討されることも考えられる。とりあえず今回踏襲された方法は、内外の複数段階による次の構成となっている。

実行委員会など自らによる第1次の自己評価。

評価委員会・専門家・観客アンケートによる第2次の外部評価。

これらのデータは事務局がまとめたのち、再び次の作業が行われる。

評価委員会で総合評価及び事業別評価をして実行委員会に報告。

ホームページなどで公開し、多様な議論を喚起して改善を図る。

評価委員会は基本方針による定性目標や戦略に基づき、一事業について複数の委員が担当したレポートを作成。これに観客のアンケートや専門家の評価を加え、多角的な評価と検証によって、総芸祭を立体的にとらえようとした。評価に主観はつきものだが、複眼の視点でよりの確な方向を見出そうとするものである。評価制度はこの蓄積によって新たな地平を拓き、さらに確かな鳥取県の文化指針になるであろうことを期待する。

3 本年度第5回「鳥取県総合芸術文化祭」の総合評価

第5回総芸祭の総額予算は昨年とほぼ同額の4,670万円。総事業数224(前年241、以下同)、主催事業91(81)、参加事業153(160)。参加人数は実行委員会事業11,882人(5,582人減)、主催事業23,886人(4,887人減)。参加者の減少は主要会場となった中部地区の地理的条件と、西部地区において、昨年プロジェクト事業であった「朝日座」事業がなかったこと、さらに東部地区の開催期間が前回の4日から3日に縮小されたことが大きな原因と思われる。しかし、まだ総芸祭を知らない県民が相当数いることを考えれば、広報などによる一層の周知徹底が求められる。

まだ45%が「初めて知った」

総芸祭の課題に「情報発信」徹底と「アンケート」回収率がある。新聞、テレビなどの主要なメディアによる情報発信は232件(237件)でほぼ前年並み。新聞・ラジオ・情報誌・県市町村広報とともに協力が得られたが、テレビは前年の73件から47件にダウンした。テレビにも郷土文化の活動や育成を認識してもらい、積極的な協力をして頂くように働きかける必要がある。アンケートでも、総芸祭を「以前から知っていた」50.0%対45.0%「今回初めて知った」とほぼ二分している。

アンケート回収率は、目標としていた念願の30%台(21.8%)に到達した。鑑賞後にペンをとるのは億劫なものだが、この飛躍は関係者が呼びかけた努力の賜物であり、次第に県民の関心も高まってきた証拠といえよう。内容は総芸祭を「鑑賞(参加)したことがある」27.2%対64.8%「初めて鑑賞(参加)した」の比率。「とても満足」44.8%に「満足」35.1%を合わせると、80%近くが満足していることになる。満足度は次の観客動員にもつながり、回答者の85.0%が「また鑑賞(参加)したい」の意志を表している。

「男性と20代」鑑賞者発掘を

鑑賞者の性別は「男性」30.8%対65.5%「女性」で、やはり圧倒的に女性が多い。男性観客の掘り起こしは、学校現場における芸術教育の位置付け、中小企業の多い労働条件など、鳥取が抱えるさまざまな課題が背景にあると推測される。

文化芸術が軽視されがちな社会構造のなかで、必然的に男性の無関心層が固まり、さらに地域経済や労働時間などが絡まった問題があると思われる。芸術鑑賞は市民の個人的な資質の問題ではあるが、いま最も大切な人間の「情」と「知」を備える上でも、政治経済関係者の理解も求められよう。

鑑賞者の年齢層は30代から60代まで15-17%台でほぼ平準化しているが、20代の10%台は次世代を担うにしては寂しい数字である。「男性と20代の鑑賞者発掘と拡大」は、総芸祭にとっても大きな命運を握っている。

鑑賞者の「住まい」は、県東部 38.8%、県中部 23.4%、県西部 30.3%、県外 4.6%であった。

鑑賞者拡大のために、「送迎バス」の運行、「託児サービス」の実施など、キメ細やかな対策も続けられているが、恩恵にあずかる人がいる一方でまだ十分に認知されていない実態もある。今後も粘り強い努力が求められる。

「第1次・実施者の自己評価」

「第1次自己評価」では実行委員・企画運営委員・事務局の全員が「自己評価シート」を提出した。当然とはいえ、昨年の提出者が76.3%であったことを思えば、誠実な提出に敬意を表したい。

自己評価の大きな課題の一つに「マネジメント」の養成がある。マネジメントは予算・準備・運営をこなす責務があるが、難点を抱えつつも意識する機運は芽生えている。マネジメント力を養成するには、優れた催しを再演し学習することも効果的である。

「定性目標」として4つ 地域文化の継承と創造・発信 県民の積極的な参画 文化活動者の発掘と育成 鑑賞者の開発と拡大 - が掲げられている。各自多少のバラツキがあるものの、平均点はクリアしている。自ら課題を確認しながら、それなりの手応えを感じているのは喜ばしい。

脱皮したい「内輪の鑑賞」

実施者アンケートでは、出演者自身が「とても満足」31.4%、「満足」41.7%、「また参加(出演)してみたい」75.6%で、ともに70%以上が充実感と次への意欲を表している。出演年齢も「20歳未満」26.0%、「20代」19.4%と上位を占めている。にもかかわらず、先に述べたように観客側に回ると激減するところに大きな問題がある。

つまり「自分は出ても、他人は見ない」という傾向が顕著であり、これは総芸祭に限らず県内の文化全体を覆う問題となっている。「他人を見て自分のレベルアップにつなげる」という視野をもたなければ意味がない。例えば評価対象外だが「鳥取県知事賞オーディション」でも、弟子や親族が出演しない限り無関心であり、「他人の演奏を聴いて学ぶ」という意欲に欠けている。

『鳥取県青少年郷土芸能の祭典』でも、途中で退席する観客マナーの悪さが指摘されている。客席が関係者で占められているようでは、鳥取文化は「内輪の文化」という卑近なレベルに陥りかねない。自らの参加はもちろん貴重な体験だが、文化はより広い視野で「鑑賞することから始まる」という認識が重要。観客と鑑賞のあり方も、重要課題の一つである。

出てきた三地域の特性

総芸祭の取り組みについては、事業や担当部署によって濃淡もあるが、今回は県内三地域の特性が浮き彫りされた。

中部地区は、倉吉市の市長や部長も出席した拡大実行委員会を開き、地元素材の『倉吉・ダブルストーリー』を盛り上げた。本番に向けた公開練習や周辺事業でも、市民を喚起した。

西部地区は、「朝日座」事業の成果を受け、会場から街へ飛び出す新たな視点で実行。ゲリラ的な参加など、なんでもありの気質を生かして「街ぐるみ劇場」となった。

東部地区は、地区企画運営委員の意識が高く、自分たちで企画実施した。経験者が多くてチームワークもよく、かなりスムーズに運営され、県民企画アートチャレンジ事業も2年目の実施となり板に付いてきた。

「この時代に、この予算とは」と県の文化行政を評価する声は多い。単年度事業は決定が遅れがちになり、「時間的な余裕がほしい」という悩みがあるが、三地域順番の「大規模プロジェクト方式」で透明性も増した。

一方で、実施者自らの課題として「予算やインスタレーションのテーマの早期決定」を望む声や、「予算配分が難しい」という悩みもあった。また、「一人に仕事が集中する」「事業内容が多く把握しきれない」「高校生、大学生の参加が少ない」という意見もある。

注目されるのは「与えられた予算で賄うのではなく、自力で収入を得ていく方法論を」「チケット販売は重要な広報活動だ」と、より積極的に捉えようとする姿勢も見られた。

「第2次・評価委員の報告」

外部の評価委員による、第2次評価はどうか。評価委員は全10人が手分けして、最低2人以上の複数で実地検証して、個々のレポートを提出後、さらにまとめて一本化した。ただし芸術評価は、加算して人数で割ればよいというものではなく、両論併記もあり得る。詳しくは各評価委員の事業別評価を参照願いたい。本編で概観すると、舞台と客席の一体化が進みレベルも徐々に上がっていると評価する一方で、舞台化への未成熟や県民への周知徹底を指摘する意見、舞台進行や音量調整への注文もあった。

中部地区『倉吉・ダブルストーリー』・『ええじゃないか！中部 今 甦る ふるさとのドラマ』

『倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～』は、町民ミュージカルのな枠をどこまで乗り越えられるか - が評価の分岐点であった。結果はプロとアマチュアのほどよい競演、音楽と朗読の組み合わせによる創造的な表現と、観客の盛り上げで一定の成果を示した。「淀屋」は講談と邦楽演奏、「八賢士」は管弦楽と朗読のコラボレーションである。時代背景の処理、2本詰め込みの消化不良に難点を残しつつも、地元素材を掘り起こす独創的な萌芽となった。出演者は中学生から60歳代まで幅広く、再演を望む声もある。

スタッフと地元の協力で、指定席の通しチケットは公演までに完売。しかし「淀屋」と「八賢士」を2分割した入れ替わりで、2演目通して見たい人が割高になり不評を呼んだ。今後、改善すべき課題である。

創作和紙人形『里見忠義と八賢士』、書道『南総里見八犬伝を書く』、写真展『わが心の原風景』、『朗読とオカリナでつづる緑石と賢治の世界』や「倉吉緋」などの発表も、地域の歴史や資源への理解を促す好企画だが、展示の工夫を求める意見もある。これら関連事業と事前の公開練習、マスコミの協力による報道など、連携に見るべき成果もあった。

西部地区『いつもの「まち」で「文化」する』

「ポスト朝日座」の行方が注目された西部地区では、米子コンベンションセンターのホールだけでなく、街も劇場にしてみまおう、という新しい切り口で事業を展開した。自分たちの「まち」を舞台に、文化の「梯子」をして街巡りする企画だが、成果と課題が並存する。

路上観察によるトマソン（無用の長物に新たな面白さを見出す芸術概念）を映像化した『88フォトモ』、映画監督・岡本喜八にちなむ展示や映画上映会、ジャズライブなどを行った『K I H A C H I 祭り in 米子』、子どもに夢を与えたミュージカル『雪の女王』、『生田長江企画展』など多彩。ガイドマップを作り、「多事業・多会場」で郡部にもエリアを拡大した。

県企画アートチャレンジ事業に、併催したワークショップなどの相乗効果で、事業参加と鑑賞者の拡大を狙い、若者参加で総芸祭を「初めて知った」人も多かった。しかし、盛りだくさんの事業は必然的に分散型となり、主催者の熱気に対して観客の出足はいま一步となり、集客面で盛り上がり欠けた。街を文化にするからには商店街の協力が不可欠だが、そこには課題も多い。やはり「朝日座」のようなシンボルを掲げ、中海文化圏を視野に入れた西部の構想をすべきとの意見も寄せられた。

東部地区『文化の森のファンタジー』

参加者の全員会議で事業構成などについて、共通認識を図ったことが東部地区では評価される。会場演出・自己資金調達・PRイベントなど積極的に行い、フリースペースも賑わった。その反面で開始遅れや時間オーバー、一部アンケートを実施していない事業があったなど、アートマネジメント力を発揮しながら反省材料も残した。フリースペースイベントには飛び入りも登場、ワークショップ、フリースペースイベントや展示は公募と招待で質の担保と広がりを図った。

『鳥取サンバ』はプロとアマチュアの差が歴然だが、自主財源比率46.3%は高く評価される。演舞の艶や張りで魅了する『邦楽風土記』は、伝統芸能に接する貴重な機会。だがここでもトラブルが多く、プログラムの間合いが長く、実施者のうち32.0%が「満足」する一方で、24.0%が「不満」という結果を招いた。この経験は今後生かしたい。

『鳥取オペラ・ルネサンス』は、第1部で文学者・杉谷代水と作曲家・高木東六を掘り起こし、第2部の高木作曲のオペラ『春香』へと巧みに繋いだ。単純明快なストーリーで分かりやすく、鳥取オペラ協会などの協力を得て出演者も熱演。部分的な問題をクリアし、県民の財産として発信できるように練り上げてはどうか。

4 今後の展望と課題

成長期に入った総芸祭は、一層のレベルアップが望まれる。総芸祭といえども鍵を握るのは地道な日常活動であり、単なる「ふるさと意識」を超えた、より深い人間の存在を探求する視点がなければ観客の心を掴むことはできまい。相変わらず「東京一極集中」といわれる文化状況だが、文化には本質的に地方も中央もなく、「地方分権」の時代こそ自由な発想による文化活動が先陣を切らなければならない。また厳しい財政のなかでレベルアップしなければ、県民の耳目も厳しくなるであろう。

参加者の拡大や観客動員も、レベルアップすることが鍵を握る。そのためにはプロの招聘も望まれるが、日常的な指導体制、文化団体や大学などの協力も不可欠となる。ある日に突然、大きなイベントを立ち上げて観客の関心と呼ぶのは難しく、やはり日常の地道な活動があってこそ県民への説得力をもつ。第7回以降の総芸祭は、基本方針改定に向けて論議が進んでいるという。今後注目したい。

郷土を越えた探求を

中部地区の『倉吉・ダブルストーリー』や西部地区の『88 フォトモ』のように、総芸祭を通して「自分のまちを再発見」し、レベルアップを図った意義は大きい。自由で自主的な「県民企画アートチャレンジ事業」も始まった。東部地区では、企画運営委員の協力態勢が整い、コーヒー販売などで観客を潤すとともに、自己資金への意識も芽生えてきた。小さな立ち上がりではあるが、民間自立への第一歩として次回に継承したい。

郷土の素材を生かすことに、だれしも異論はなかろう。ただしそれが、安易な地元賛歌や「ご当地ソング」の自己満足に終わっては意味がない。地元に関係があるから取り上げるのではなく「人間の存在・根源そのものに迫るようなテーマを追求していかないと、心に響いてこない」という評価委員の意見は、もっとも核心を突いた指摘である。

再演で向上を図ろう

東部地区では『鳥取オペラ・ルネサンス』が注目された。ユニークな導入の第1部に続き、第2部の高木東六作曲のオペラ『春香』が上演された。『倉吉・ダブルストーリー』も再演を望む声があるが、優れた演目は練り上げて再演すれば県民も納得するであろう。わが国の評論の先覚者『生田長江』の県内巡回展を期待する声も高い。

過去にも県民オペラや県民ミュージカルが上演されたが、ほとんど一回限りの上演でもったいない限りである。再演でレベルアップを図るのは、指導者やアートマネジメントの着実な養成と環境整備にもつながる。新作でなければ国からの助成がなく、財源的に難しいという現実があるかもしれない。だが、国の助成がなければできない体質では、県に依存した民間の運動と同じ構図で、いつまでも自立できないことになる。舞台化には何が必要で、何を削減できるか - 再演に向け、論議をする価値があると思われる。

PRに望まれる工夫

ポスターやチラシにも、工夫が望まれる。例えば『倉吉・ダブルストーリー』のポスターやチラシは、デザイン・色彩・紙質にもこだわり、上品で洗練された出来栄であった。しかしこれを見る限りでは、何を訴える舞台なのか伝わるものがない。共通項があるとすれば、これは「お家再興のため、権力に抗った人々」の物語である。ここに焦点を絞り意図を共有すれば、脚本ももう少し違ったのではなかろうか。

ポスターやチラシの制作は専門性の高い仕事だが、主催者は少なくとも訴えたい内容を把握していなければならない。しかもポスターは、街頭などでほとんど歩きながら見るものだから、県民にアピールするためには数少ない言葉で瞬間に心を捉える必要がある。民間団体の予算を切り詰めた質素なチラシに比べれば、総芸祭のカラフルな宣伝材料ははるかに恵まれていることも肝に銘じたい。

なお、中部地区では『倉吉・ダブルストーリー』をプレイベントで盛り上げ、東部地区でも鳥取駅構内とショッピングセンターでミニコンサートを開くなど、積極的に新しい事前PRに取り組んだことは大いに評価されよう。

利害を超えて結束しよう

観客拡大では、依然として男性と若者の動員が課題だ。幼少時の体験も大切で、大人や教育現場、そして地域社会が与える影響は大きい。「内輪的」鑑賞態度も問題だ。「催しが集中して、

見たいものが見られない」という声があるが、文化を日常的に体験する趣旨からすれば、総芸祭のあり方も抜本的に見直す必要がある。

「この時代に、この予算とは、鳥取県は文化芸術に力を入れている素晴らしい県だと思う」という感想があったごとく、県の文化行政は評価されるが、次の課題である「民間自立」は決して容易ではない。主要会場となる鳥取県民文化会館や倉吉未来中心、米子コンベンションセンターも、指定管理者制度のもとで経営が厳しく、民間も苦しい。そこでどう折り合いをつけるか、工夫のしどころである。

総芸祭の開幕となった「鳥取県美術展覧会」は、過去の問題点を洗うことで半世紀を経て改革された。この時代を克服するには文化の本質と本音を語り合い、それぞれの課題を共有し理解しあうことにより、誇りをもって利害を超えた「文化」運動に結集する以外に道はなかろう。

(鳥取県総合芸術文化祭評価委員会 座長 角秋 勝治)

鳥取県総合芸術文化祭の実施概要

1 第5回鳥取県総合芸術文化祭の実施結果

1 概要

県民による文化芸術の祭典として特色ある地域文化の振興を図ることを目的として、プロジェクト事業「倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～」、県民企画アートチャレンジ事業及びワークショップ・フリースペースイベント参加体験型事業を実施し、地域に根ざした創造的な舞台芸術や、気軽に文化芸術にふれることのできる多彩な事業に取り組んだ。

2 開催期間

平成19年9月15日(土) 鳥取県美術展覧会開幕日 から11月30日(金)まで

3 実施主体

主催：鳥取県総合芸術文化祭実行委員会、鳥取県、鳥取県教育委員会、
(財)鳥取県文化振興財団、鳥取県文化団体連合会
共催：市町村、市町村教育委員会

4 実施状況

参加人数：23,886人 (主催事業のみ)
総事業数：244事業 (主催事業91 参加事業153)

5 事業内容

(1) 主催事業

プロジェクト事業 1事業

倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～	11月11日(日) 倉吉未来中心 大ホール	県中部地区にゆかりのある「淀屋」と「里見八賢士」を題材としたオリジナル舞台作品を、地元活動者とプロとの協働により創作、上演。
------------------------	-----------------------------	--

県民企画アートチャレンジ事業 6事業

公募により選ばれた、地域で活動するアーティストによる企画

88フォトモ	11月3日(土) ～4日(日) 米子コンベンションセンター 情報プラザほか	米子の街並みを写真に撮り、立体写真に組み立て(=フォトモ)展示。
KIHACHI祭り in米子	11月3日(土) ～4日(日) ライブハウス「ベリィ」、 旧岡本喜八宅ほか 商店街	米子出身の映画監督岡本喜八をテーマに、映画上映、音楽ライブやデザインアート展示などを実施。
ミュージカル公演 「雪の女王」	11月4日(日) 米子市淀江文化センター さなめホール	「人を信じる力が愛となって人を動かす力となる」をメインテーマとしたミュージカルを公演。
鳥取サンバ	11月23日(金・祝) 県民文化会館 小ホール	打楽器と歌によるサンバのコンサートを実施。100年に渡る鳥取とブラジルとの交流の歴史も再発見した。
鳥取オペラ・ルネサンス	11月24日(土) 県民文化会館 小ホール	境港出身の杉谷代水と米子出身の高木東六の軌跡をコンサート形式で迎える創作オペラなどを公演。
邦楽風土記	11月25日(日) 県民文化会館 小ホール	古代から受け継がれてきた日本独自の和楽器・舞・唄を中心に、伝統文化の魅力を紹介。

ワークショップ・フリースペースイベント参加体験型事業 3地域 80プログラム

気軽に文化芸術を体験する、各種ワークショップやフリースペースを利用したステージ発表、展示など

西部会場	11月1日(木)~4日(日) 米子コンベンションセンター、淀江文化センターほか	『いつもの「まち」で「文化」する!』をテーマに、生田長江顕彰会やミニコンサート、体験型ワークショップなどを実施(22事業)
中部会場	11月8日(木)~11日(日) 倉吉未来中心ほか	「ええじゃないか!中部~今甦るふるさとのドラマ~」をテーマに、写真展、工芸展、ワークショップなどを実施(22事業)
東部会場	11月23日(金・祝) ~25日(日) 県民文化会館	「文化の森のファンタジー」をテーマに、日本伝統文化の一日「和く和く伝統文化町四丁目四番地の四」企画などを実施(36事業)

その他の主催事業 4事業

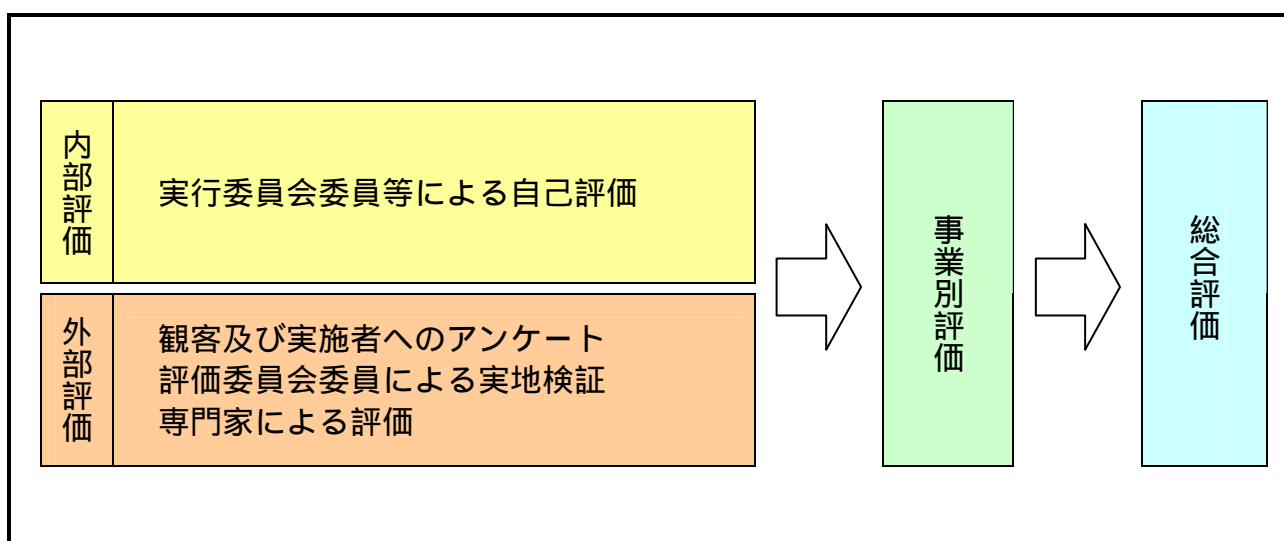
第51回鳥取県美術展覧会	9/15(土) ~11/27日(火) 県立博物館ほか	県民からの応募による洋画・日本画・版画・彫刻・工芸・書道・写真・デザインの入選作品などを展示。
第43回郷土の民俗芸能大会	11/17(土) 倉吉未来中心	因幡麒麟獅子舞、宇野三ツ星盆踊り、高城牛追掛節ほか郷土の民俗芸能を披露。
鳥取県青少年郷土芸能の祭典2007	11/4(日) 米子コンベンションセンター	白波五人男、三徳山子ども行者太鼓、淀江さんこ節ほか子どもたちによる郷土芸能を披露。
鳥取県出身のアーティストによるコンサートこどもの楽園	11/25(日) 県民文化会館	鳥取県出身のアーティストたちと宮川彬良による親子で楽しむコンサートを実施。

(2) 参加事業

鳥取県総合芸術文化祭の開催趣旨に賛同した事業が、県内各地で開催された。(153事業)

2 評価の実施概要

鳥取県総合芸術文化祭の基本方針に定められた「定性目標・戦略」及び予め設定された「定量目標」の達成状況などについての評価を、下図の手順により実施した。



(1) 自己評価

実行委員会委員、地区企画運営委員会委員及び事務局による自己評価を、19の評価項目について点数評価(4点満点)とその根拠を記載する方式で実施。

【自己評価提出状況】

	提出数	対象人数	提出率	昨年の提出率
実行委員会委員	18	18	100.0%	81.8%
地区企画運営委員会委員	25	25	100.0%	61.5%
事務局	10	10	100.0%	100.0%
計	53	53	100.0%	76.3%

(2) 観客及び実施者アンケート

観客(鑑賞者・参加者)及び実施者(出演者・スタッフ)に対してアンケートを実施。

【観客アンケート】

区 分	観客数	アンケート数	回収率
倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～	1,826	414	26.3%
88フォトモ	1,153	289	25.1%
KIHACHI祭りin米子	1,211	351	29.0%
ミュージカル「雪の女王」	747	234	31.3%
鳥取サンバ	362	99	27.3%
鳥取オペラ・ルネサンス	200	-	-
邦楽風土記	317	160	50.5%
西部地区ワークショップ (8事業)	157	72	45.9%
西部地区フリースペースイベント (14事業)	560	156	27.9%
中部地区ワークショップ (8事業)	232	101	43.5%
中部地区フリースペースイベント (14事業)	1,533	236	15.4%
東部地区ワークショップ (10事業)	184	92	50.0%
東部地区フリースペースイベント (26事業)	3,400	1,559	45.9%
実行委員会主催事業 計(A)	11,882	3,763	32.4%
鳥取県青少年郷土芸能の祭典2007	1,033	169	16.4%
鳥取県出身のアーティストによるコンサート こどもの楽園	1,367	284	20.8%
鳥取県文化振興財団主催事業 計(B)	2,400	453	18.9%
合 計(A+B)	14,282	4,216	30.0%
第51回鳥取県美術展覧会	8,604		
第43回郷土の民俗芸能大会	1,000		
その他の主催事業 計(C) 個別評価を行わない事業	9,604		
総 計(A+B+C)	23,886		

【実施者アンケート】

区 分	実施者数	アンケート数	回収率
倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～	70	56	80.0%
県民企画アートチャレンジ事業(6事業)	310	165	53.2%
ワークショップ・フリースペースイベント(80事業)	794	407	51.3%
実行委員会主催事業 計	1,174	628	53.5%

(3) 評価委員会委員による評価

評価委員会委員による実地検証を実施し、事業ごとに「定性目標の達成度及び戦略についての検証」、「成果と課題」及び「事業に対する意見」をレポート形式で提出。この実地検証結果を基本に、評価資料（自己評価、観客及び実施者アンケート、専門家評価等）を参考として評価を行い、事業ごとの成果と今後の課題を『事業別評価』としてまとめた。

(4) 専門家による評価

今後の良質な作品創造に資するため、主な事業について、専門家による芸術性・マネジメントなど多様な観点からの評価を実施。

評価を実施した事業及び評価した専門家は次の通り。

対象事業	専門家	略歴
倉吉・ダブルストーリー 【第1部】淀屋の世界	ひらの ひでとし 平野 英俊	舞踊評論家、文部科学省文化審議会（文化財分科会）専門委員
倉吉・ダブルストーリー 【第2部】八賢士の世界	くすのせ す が こ 楠瀬 寿賀子	（財）津田塾会津田ホールプロデューサー、（財）地域創造「公共ホール音楽活性化事業」コーディネーター
88フォトモ	なかがわ いくお 中川 幾郎	帝塚山大学法政策学部教授
KIHACHI祭りin米子		
鳥取オペラ・ルネサンス	たかはし ひろこ 高橋 浩子	大阪音楽大学音楽学部教授
鳥取県青少年郷土芸能の祭典 2007	もりしげ ゆきとし 森重 行敏	東京芸術大学講師ほか
	どい しゅんすけ 土居 俊介	元NHKプロデューサー
鳥取県出身のアーティストによるコンサート こどもの楽園	しまだ くにお 嶋田 邦雄	元日本経済新聞社記者
	あいはら まこと 栗飯原 眞	元産経新聞社記者

自己評価

19の評価項目についての実行委員会委員、地区企画運営委員会委員(以下「委員」という。)及び事務局による自己評価結果から、点数評価(4点満点)のうち高い評価をした者(4点及び3点を付けた者)の割合を求め、その割合が75%以上の項目を「成果」、50%以下の項目を「課題」として整理した。

また、委員と事務局との評価に乖離が顕著(30ポイント以上)である項目についても「課題」として整理した。

《成果》

- 【マネジメント】事業の運営(本番)に関すること
- 【戦略 5】劇場(会場)全体が人が集うまちの広場となるための演出
- 【戦略 6】企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などへの公募制の導入
- 【戦略10】誰もが文化芸術を鑑賞、体験できる機会と環境の整備
- 【戦略11】多様な文化芸術活動を選択できる多彩な事業の実施

《課題》

- 【定性目標2】文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画
- 【戦略 9】若者が主導となり企画、参画する事業の展開
- 【戦略12】鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動の実施

ここで言う「アウトリーチ活動(文化芸術の普及活動)」とは、事業に先立って行われるワークショップ、シンポジウム、ミニコンサート、バックステージツアー及び展示などを指します。

自己評価項目	高い評価者の割合		
	全体	委員	事務局
【マネジメント】事業の準備・推進に関すること	67.9%	69.8%	60.0%
【マネジメント】事業の運営(本番)に関すること	84.9%	86.0%	80.0%
【マネジメント】予算に関すること	58.5%	53.5%	80.0%
【定性目標1】鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術の創造と発信ができたか	69.8%	72.1%	60.0%
【戦略1】アマチュアと専門家のコラボレーションや芸術ジャンル間のコラボレーションによる良質な作品創造ができたか	71.7%	74.4%	60.0%
【戦略2】伝統芸能や郷土芸能など鳥取県の地域文化を継承する事業を展開することができたか	58.5%	60.5%	50.0%
【定性目標2】文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を図ることができたか	67.9%	74.4%	40.0%
【戦略3】地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進できたか	58.5%	60.5%	50.0%
【戦略4】総合的な広報の推進体制を強化することができたか	69.8%	72.1%	60.0%
【戦略5】劇場(会場)全体が「人が集うまちの広場」となるための演出をすることができたか	79.2%	81.4%	70.0%
【戦略6】企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などへの公募制を導入できたか	81.8%	79.1%	90.0%
【戦略7】若者が参画できる環境を整えることができたか	52.8%	55.8%	40.0%
【定性目標3】次世代を担う子どもや若者の文化芸術活動者の発掘・育成を図ることができたか	69.8%	69.8%	70.0%
【戦略8】世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を実施できたか	58.5%	60.5%	50.0%
【戦略9】若者が主導となり企画、参画する事業を展開できたか	47.2%	48.8%	40.0%
【定性目標4】県民の文化芸術を楽しむ感性を養成し、鑑賞者の開発と拡大を図ることができたか	67.9%	72.1%	50.0%
【戦略10】誰もが文化芸術を鑑賞、体験できる機会と環境の整備ができたか	81.1%	79.1%	90.0%
【戦略11】多様な文化芸術活動を選択できる多彩な事業を実施できたか	77.4%	79.1%	70.0%
【戦略12】鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行うことができたか	56.6%	62.8%	30.0%

観客・実施者アンケート

1 観客アンケート

観客（鑑賞者及び参加者）に対して実施したアンケートの集計結果を掲載。なお、各項目における事業区分については次の通り整理した。（特に表記がない場合は全体について記述したもの）

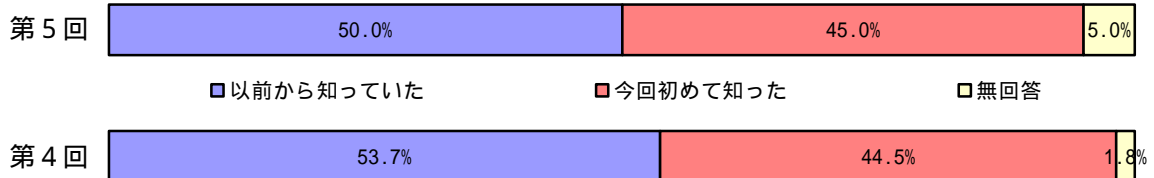
事業名	各項目における事業区分
倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～	倉吉・ダブルストーリー
88フォトモ KIHACHI祭りin米子 ミュージカル「雪の女王」 鳥取サンバ 邦楽風土記	県民企画アートチャレンジ事業
東部地区ワークショップ・フリースペースイベント 中部地区ワークショップ・フリースペースイベント 西部地区ワークショップ・フリースペースイベント	東部地区 WS・FE } 各地区 WS・FE 中部地区 WS・FE } 西部地区 WS・FE }
鳥取県青少年郷土芸能の祭典2007 鳥取県出身のアーティストによるコンサート こどもの楽園	財団主催事業

総合芸術文化祭という催しがあることを知っていましたか？

総合芸術文化祭について、「今回初めて知った」という方が45.0%となっている。一方、「以前から知っていた」という方は50.0%となっており、ほぼ二分している。

	第5回	第4回	増減
以前から知っていた	1,119 (50.0%)	1,870 (53.7%)	3.7ポイント
今回初めて知った	1,007 (45.0%)	1,551 (44.5%)	+0.5ポイント
無回答	112 (5.0%)	62 (1.8%)	+3.2ポイント
計	2,238	3,483	-

【前回との比較】

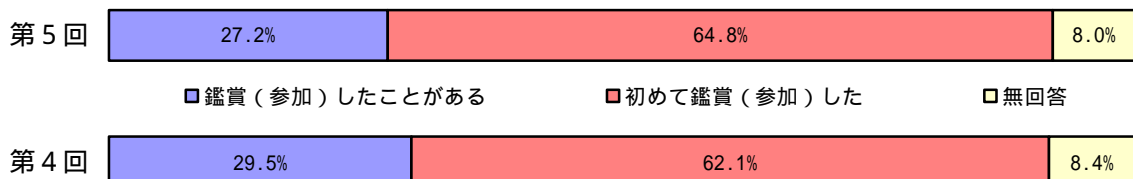


これまでに総合芸術文化祭の催しを鑑賞（参加）したことがありますか？

総合芸術文化祭への参加経験については、初めて鑑賞（参加）した方が64.8%となっている。そのうち、総合芸術文化祭を「以前から知っていた」という方は30.6%（444人）であった。

	第5回	第4回	増減
鑑賞（参加）したことがある	609 (27.2%)	1,029 (29.5%)	2.3ポイント
初めて鑑賞（参加）した	1,451 (64.8%)	2,161 (62.1%)	+2.7ポイント
無回答	178 (8.0%)	293 (8.4%)	0.4ポイント
計	2,238	3,483	-

【前回との比較】

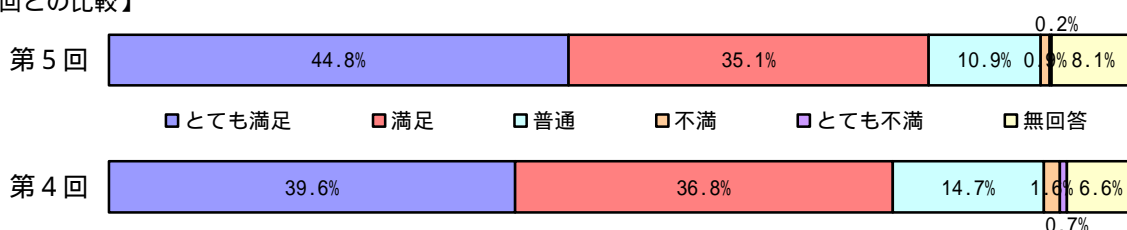


本日の催しはいかがでしたか？

「とても満足」、「満足」と回答した方は、前回から 3.5 ポイント増の 79.9%となっている。一方、「不満」、「とても不満」と回答した方は、1.2 ポイント減の 1.1%となっている。「とても満足」、「満足」と回答した方を事業別に見ると、倉吉・ダブルストーリー（85.5%）、県民企画アートチャレンジ事業（81.1%）、各地区WS・FE（74.1%）、財団主催事業（86.8%）となっている。

	第5回	第4回	増減
とても満足	2,420 (79.9%)	3,225 (76.4%)	+3.5ポイント
満足			
普通	328 (10.9%)	621 (14.7%)	3.8ポイント
不満	34 (1.1%)	99 (2.3%)	1.2ポイント
とても不満			
無回答	246 (8.1%)	278 (6.6%)	+1.5ポイント
計	3,028	4,223	-

【前回との比較】



また総合芸術文化祭の催しを鑑賞（参加）してみたいですか？

次回への参加希望については、前回から 1.5 ポイント減の 85.0%が「鑑賞（参加）したい」と回答している。一方、「もう鑑賞（参加）したくない」という方は 2.1 ポイント減の 1.0%となっている。

次回も鑑賞（参加）を希望した方を事業別に見ると、倉吉・ダブルストーリー（84.3%）、県民企画アートチャレンジ事業（85.7%）、各地区WS・FE（84.6%）となっている。各事業とも、催しに「とても満足、満足」と回答した方と同等あるいはそれ以上の方が、次回も鑑賞（参加）を希望している。

	第5回	第4回	増減
ぜひ鑑賞（参加）したい	2,189 (85.0%)	3,013 (86.5%)	1.5ポイント
鑑賞（参加）したい			
もう鑑賞（参加）したくない	25 (1.0%)	109 (3.1%)	2.1ポイント
わからない	214 (8.3%)	197 (5.7%)	+2.6ポイント
無回答	147 (5.7%)	164 (4.7%)	+1.0ポイント
計	2,575	3,483	-

【前回との比較】



本日の催しを鑑賞（参加）した理由は何ですか？ 複数回答可

「内容に興味があった」を鑑賞（参加）理由とした方が最も多く 42.7%となっている。事業別では中部地区WS・FE（71.9%、238/331人）が最も割合が高く、続いて88フォトモ（53.7%、144/268人）、倉吉・ダブルストーリー（47.1%、222/471人）となっている。
 「その他」の約7割が「偶然通りかかった（257人）」と回答している。

	第5回	第4回	増減
内容に興味があった	1,161 (42.7%)	1,100 (40.2%)	+2.5ポイント
関係者がいた	867 (31.8%)	928 (34.0%)	2.2ポイント
鑑賞（参加）を勧められた	318 (11.7%)	384 (14.1%)	2.4ポイント
その他	375 (13.8%)	321 (11.7%)	+2.1ポイント
計	2,721	2,733	-

【前回との比較】

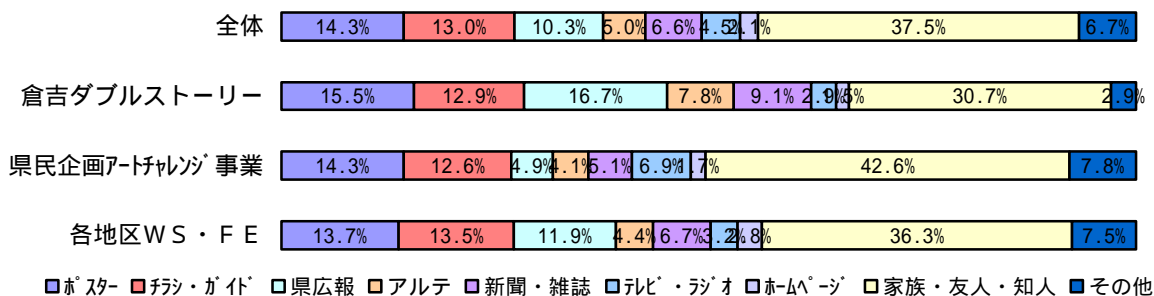


本日の催しを何で知りましたか？ 複数回答可

「家族・友人・知人」から知ったという方が最も多く 37.5%となっている。事業別では、鳥取サンバ（68.1%、79/116人）が最も割合が高く、続いてKIHACHI祭りin米子（48.9%、137/280人）、西部地区WS・FE（45.3%、136/300人）となっている。
 「家族・友人・知人」以外の情報源の上位は、「ポスター（14.3%）」、「ガイド・チラシ（13.0%）」及び「県広報（10.3%）」となっており、事業別に見てもほぼ同様の傾向が見られる。

	倉吉・ ダブルストーリー	県民企画 アートチャレンジ事業	各地区 WS・FE	合計
ポスター	112 (15.5%)	183 (14.3%)	192 (13.7%)	487 (14.3%)
チラシ・ガイド	93 (12.9%)	162 (12.6%)	190 (13.5%)	445 (13.0%)
県広報（県政だよりなど）	120 (16.7%)	63 (4.9%)	167 (11.9%)	350 (10.3%)
文化振興財団情報誌アルテ	56 (7.8%)	52 (4.1%)	62 (4.4%)	170 (5.0%)
新聞・雑誌	66 (9.1%)	66 (5.1%)	94 (6.7%)	226 (6.6%)
テレビ・ラジオ	21 (2.9%)	89 (6.9%)	45 (3.2%)	155 (4.5%)
ホームページ	11 (1.5%)	22 (1.7%)	39 (2.8%)	72 (2.1%)
家族・友人・知人	221 (30.7%)	546 (42.6%)	510 (36.3%)	1,277 (37.5%)
その他	21 (2.9%)	100 (7.8%)	106 (7.5%)	227 (6.7%)
計	721	1,283	1,405	3,409

【事業区分別の比較】



観客属性

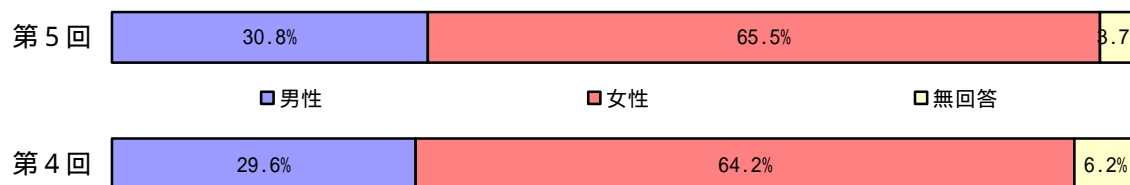
(1) 性別

女性 65.5%、男性 30.8%となっており、昨年同様、女性の割合が高くなっている。
女性の割合を事業別に見ると、ミュージカル「雪の女王」(77.8%、182/234人)が最も高く、続いて鳥取県出身のアーティストによるコンサート(77.5%、220/284人)、邦楽風土記(66.9%、107/160人)となっている。

男性の割合を事業別に見ると、88フォトモ(46.4%、134/289人)が最も高く、続いてKIHACHI祭りin米子(39.7%、93/234人)、鳥取サンバ(35.4%、35/99人)となっている。

	第5回	第4回	増減
男性	933 (30.8%)	1,251 (29.6%)	+1.2ポイント
女性	1,983 (65.5%)	2,710 (64.2%)	+1.3ポイント
無回答	112 (3.7%)	262 (6.2%)	2.5ポイント
計	3,028	4,223	-

【前回との比較】



(2) 年齢

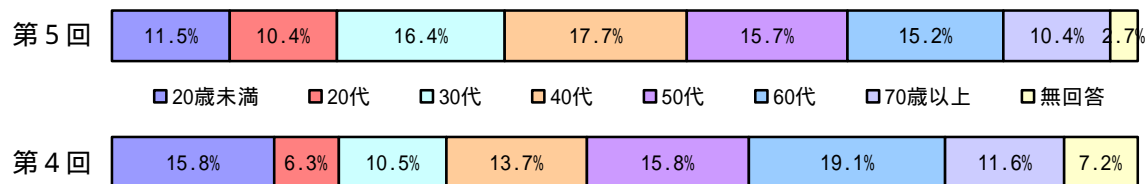
30代から60代までの年齢層は概ね平準化している。

40代以下の割合を事業別に見ると、鳥取県出身のアーティストによるコンサート(84.2%、239/284人)が最も高く、続いて88フォトモ(77.2%、223/289人)、KIHACHI祭りin米子(71.8%、168/234人)となっている。

50代以上の割合を事業別に見ると、鳥取県青少年郷土芸能の祭典(64.5%、109/169人)が最も高く、続いて倉吉・ダブルストーリー(59.7%、247/414人)、邦楽風土記(55.0%、88/160人)となっている。

	第5回	第4回	増減
20歳未満	348 (11.5%)	665 (15.8%)	4.3ポイント
20代	315 (10.4%)	267 (6.3%)	+4.1ポイント
30代	495 (16.4%)	442 (10.5%)	+5.9ポイント
40代	537 (17.7%)	580 (13.7%)	+4.0ポイント
50代	476 (15.7%)	668 (15.8%)	0.1ポイント
60代	460 (15.2%)	807 (19.1%)	3.9ポイント
70歳以上	316 (10.4%)	489 (11.6%)	1.2ポイント
無回答	81 (2.7%)	305 (7.2%)	4.5ポイント
計	3,028	4,223	-

【前回との比較】



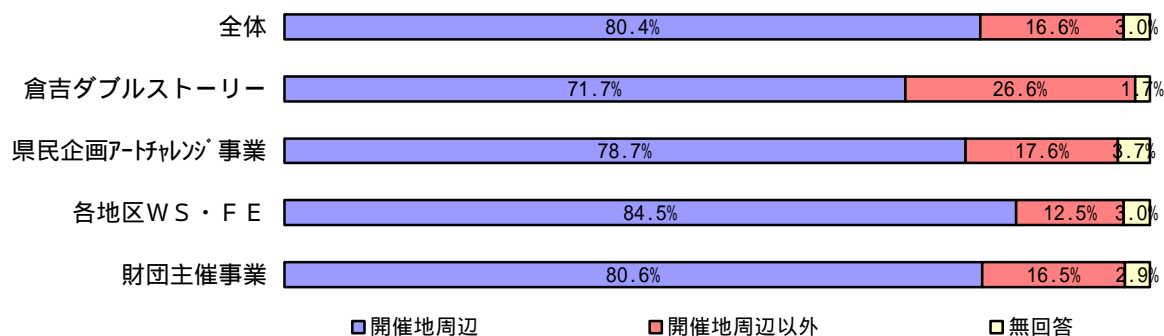
(3) 居住地

開催地周辺市町村からの参加が8割となっている。

他地域からの参加割合を事業別に見ると、全県事業（プロジェクト事業）として実施した倉吉・ダブルストーリー（26.6%、110/414人）が最も高く、続いて鳥取サンパ（25.3%、25/99人）、KIHACHI祭りin米子（23.1%、54/234人）となっている。

	倉吉・ ダブルストーリー	県民企画 アートチャレンジ事業	各地区 WS・FE	財団主催 事業	合計
開催地周辺	297(71.7%)	572(78.7%)	968(84.5%)	365(80.6%)	2,202(80.4%)
開催地周辺以外	110(26.6%)	128(17.6%)	143(12.5%)	75(16.5%)	456(16.6%)
うち県外	11(2.7%)	58(8.0%)	39(3.4%)	14(3.1%)	122(4.5%)
無回答	7(1.7%)	27(3.7%)	34(3.0%)	13(2.9%)	81(3.0%)
計	414	727	1,145	453	2,739

【事業区分別の比較】



2 実施者アンケート

実施者（出演者及びスタッフ）に対して実施したアンケートの集計結果を掲載。なお、各項目における事業区分については次の通り整理した。（特に表記がない場合は全体について記述したもの）

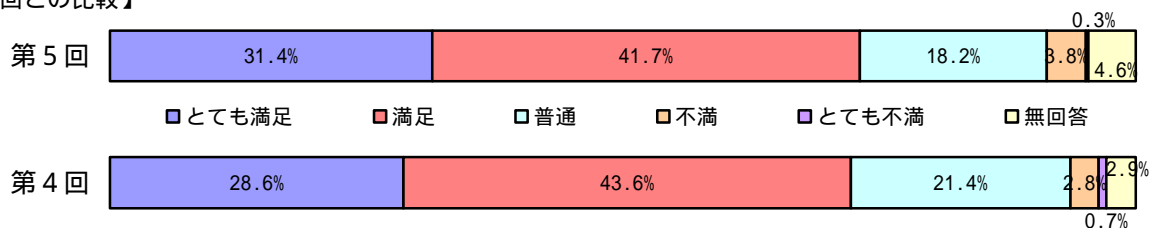
事業名	各項目における事業区分
倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～	倉吉・ダブルストーリー
88フォトモ KIHACHI祭りin米子 ミュージカル「雪の女王」 鳥取サンバ 鳥取オペラ・ルネサンス 邦楽風土記	県民企画アートチャレンジ事業
東部地区ワークショップ・フリースペースイベント 中部地区ワークショップ・フリースペースイベント 西部地区ワークショップ・フリースペースイベント	各地区WS・FE

今回の参加（出演）はいかがでしたか？

「とても満足」「満足」と回答した方は、前回から 0.9 ポイント増の 73.1% となっている。一方、「不満」「とても不満」と回答した方は、3.2 ポイント減の 4.1% となっている。「とても満足」「満足」と回答した方を事業別に見ると、**倉吉・ダブルストーリー**（91.1%）、**県民企画アートチャレンジ事業**（78.8%）、**各地区WS・FE**（68.3%）となっている。

	第5回	第4回	増減
とても満足	459 (73.1%)	419 (72.2%)	+0.9 ポイント
満足			
普通	114 (18.2%)	124 (21.4%)	3.2 ポイント
不満	26 (4.1%)	20 (3.5%)	+0.6 ポイント
とても不満			
無回答	29 (4.6%)	17 (2.9%)	+1.7 ポイント
計	628	580	-

【前回との比較】



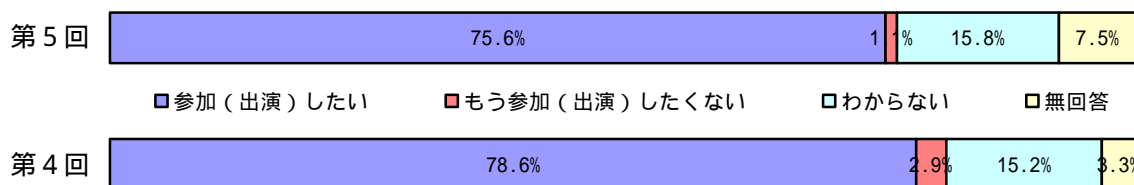
また参加（出演）してみたいですか？

次回への参加希望については、前回から 3.0 ポイント減の 75.6%が「参加（出演）したい」と回答している。一方、「もう鑑賞（参加）したくない」という方は 1.8 ポイント減の 1.1%となっている。

次回も参加（出演）を希望した方を事業別に見ると、倉吉・ダブルストーリー（78.6%）、県民企画アートチャレンジ事業（73.9%）、各地区WS・FE（77.6%）となっている。

	第5回	第4回	増減
参加（出演）したい	475（75.6%）	456（78.6%）	3.0ポイント
もう参加（出演）したくない	7（1.1%）	17（2.9%）	1.8ポイント
わからない	99（15.8%）	88（15.2%）	+0.6ポイント
無回答	47（7.5%）	19（3.3%）	+4.2ポイント
計	628	580	-

【前回との比較】



実施者属性

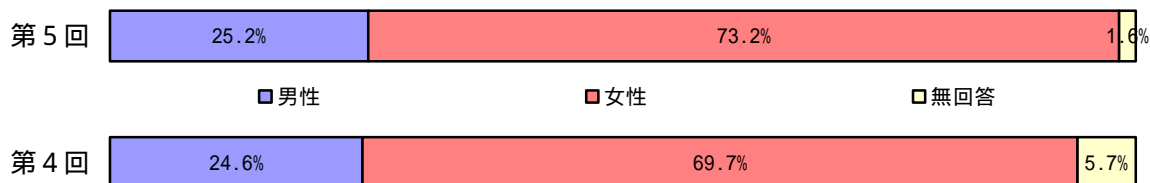
（1）性別

女性 73.2%、男性 25.2%となっており、昨年同様、女性の割合が高くなっている。

事業別に見ると、倉吉・ダブルストーリー（男性 26.8%、女性 73.2%）、県民企画アートチャレンジ事業（男性 35.2%、女性 62.4%）、各地区WS・FE（男性 20.9%、女性 77.6%）となっている。

	第5回	第4回	増減
男性	158（25.2%）	143（24.6%）	+0.6ポイント
女性	460（73.2%）	404（69.7%）	+3.5ポイント
無回答	10（1.6%）	33（5.7%）	4.1ポイント
計	628	580	-

【前回との比較】



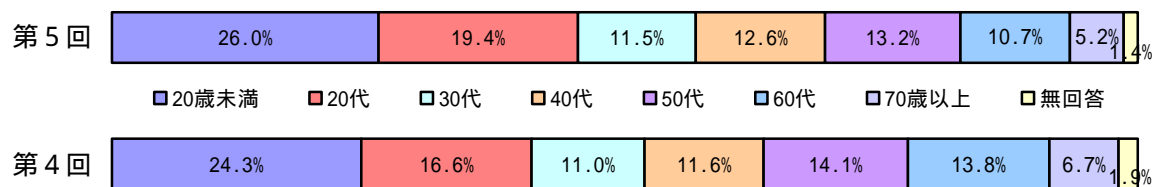
(2) 年齢

20代以下が全体の4割以上を占めている。

20代以下の占める割合を事業別に見ると、倉吉・ダブルストーリー(50.0%、28/56人)、県民企画アートチャレンジ事業(54.5%、90/165人)、各地区WS・FE(41.0%、167/407人)となっている。

	第5回	第4回	増減
20歳未満	163 (26.0%)	141 (24.3%)	+1.7ポイント
20代	122 (19.4%)	96 (16.6%)	+2.8ポイント
30代	72 (11.5%)	64 (11.0%)	+0.5ポイント
40代	79 (12.6%)	67 (11.6%)	+1.0ポイント
50代	83 (13.2%)	82 (14.1%)	0.9ポイント
60代	67 (10.7%)	80 (13.8%)	3.1ポイント
70歳以上	33 (5.2%)	39 (6.7%)	1.5ポイント
無回答	9 (1.4%)	11 (1.9%)	0.5ポイント
計	628	580	-

【前回との比較】



事業別評価

評価委員会委員による実地検証及び各種資料に基づき、事業別に予め設定された定性目標の達成状況及び成果と課題を整理した。

倉吉・ダブルストーリー ～淀屋と八賢士の世界～

平成 19 年 11 月 11 日（日） 倉吉未来中心 大ホール

執筆担当	萩原 俊郎
	押本 昌幸

設定された定性目標及び戦略

定性目標①鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 アマチュアと専門家のコラボレーションや、芸術ジャンル間のコラボレーションにより、良質な作品を創造します

戦略 伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業を展開します

定性目標②文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます

定性目標③次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

定性目標④県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行います

定性目標の達成状況（成果と課題を含む）

定性目標①鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 アマチュアと専門家や、芸術ジャンル間のコラボレーションによる良質な作品の創造

上方・倉吉をつなぐ歴史ミステリーが注目されている「淀屋」と、もともと倉吉での史実や物語が乏しい「八賢士」は題材として対照的だが、脚本・演出も好対照だった。予備知識がないと理解しにくい「淀屋」は、歴史解説的な講談を取り入れる手法でのぞんだが、劇が細切れとなり、ドラマの余韻に十分浸れなかった。1時間余りの公演で説明的、急ぎ足の歴史解説になった感があり、市民を含むアマチュア演者が熱演しただけに残念。闕所までの上方の部分は講談仕立て、倉吉の物語は演劇といった方法もあったのでは。

反対に「八賢士」は多くを説明せず、幕間をゆったりとした弦楽器の調べにゆだねた。この効果が生きて悲運の主君と家臣の物語にすんなり感情移入し、観客がそれぞれ心の中でイメージを膨らませることに成功した。それが稀なるカーテンコールとなった。ただ「あのよう直情径行な主君では、家臣たちはいくら命があっても足りない…」とぼやいていたのは私だけだろうか。ストーリーが分かりやすいのはいいが、史実が薄い分、ドラマの奥行き、深みに欠けたのは惜しい。

戦略 伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業の展開

なぜ単独でなく「ダブル」で上演しなければならなかったのか、よく分からない。どちらも倉吉の歴史や持ち味が表現するには適した物語だが、どちらも中途半端な扱いになった観客も。また、里見公の悲運に市民が涙したのは多分初めてにしても、淀屋の歴史も含めて、史実と演劇性（創作）の違いは説明しておかないと、「千刃扱きのフィクサーは淀屋」といった確認されていない“史実”が一人歩きしてしまう。

倉吉と同じく淀屋サミットで盛り上がる大阪、八賢士で交流のある千葉県館山市で劇の再公演ができないか、という話もある。「アマチュアが参加した演劇の再上演は、人手・財政両面で困難」と県は説明するが、県内で盛り上がるだけが県総合芸術文化祭ではあるまい。出張公演は大いにやるべき。それこそ「地域文化の誇り、発展・継承」に通じるのでは。

定性目標②文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などへの公募制の導入

地元のアマチュア演劇人とともに老若男女の一般市民が舞台をにぎわし、参加型イベントとして盛り上がった。今回二つの違う劇で舞台セットを共有する制約があったが、立体的な仕掛けや映像投影などの工夫、仕掛けでまったく別々のイメージを作り出したスタッフの努

力を称えたい。

定性目標3次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業の実施

演じる - 参加体験型事業としては上記の通り合格点、ただし観る 鑑賞型としては観客席に世代的偏り（中高年）が目立った。若い世代へのアプローチがまだ不足。

定性目標4県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動の実施

総合芸術文化祭にかぎらず、県中部で未来中心の大ホール（1500人）を埋めるには、大変な労力がある（特に広報宣伝）。来場者のアンケートを見ると、総合芸術文化祭の認知度は一般にまだ低い。ふだんから鳥取県民が気軽に舞台芸術に接し、文化ホール・美術館に足を運ぶ現状にはなっていない。アウトリーチするには、文化芸術を享受する側の県民（一般市民）の声を聴いて回ることだが、ともすれば受け手より送り手である文化団体、芸術団体関係者の意見が支配的になる。

県民企画アートチャレンジ事業 88フォトモ
平成19年11月3日（土・祝）～4日（日）米子コンベンションセンター情報プラザほか

執筆担当	浜田 あけみ
	植田 丞

設定された定性目標及び戦略
定性目標2 文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します
戦略 地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進します
戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます
定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります
戦略 若者が主導となり企画、参画する事業を展開します
定性目標4 県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります
戦略 誰もが文化芸術を鑑賞、体験できる機会と環境を整えます
戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行います

定性目標の達成状況

ただの制作物展示にとどまらず、来場者参加型で一緒に創り上げるイベントに上手く仕上がっていた。

良いアーティストとの出会いに恵まれたこともあるが、その方を口説き落とす熱意と周囲を巻き込み最後まで運営するパワーは、いずれも大変優れていたと思う。企画立案された方の情熱を隅々まで感じるイベントであった。

事前にフォトモ作成技術を習得するワークショップ、講演会、作品組み立て等の関連事業を行ったことにより、参加者の興味や理解がより深まった。

ワークショップの様子をブログで紹介する等、情報発信も上手くできていたと思う。

ヘルプスタッフが来場者に声かけをし、また参加希望者にデジカメを貸与するなど、気軽に誰でも参加できる配慮もされていた。

参加者の男女比は半々。他のイベントに比して、男性の興味を惹きつけたと評価できる。

年代も高齢者以外はほぼ同割合であり、様々な年代の人々にアピールする内容であった。

成果と課題

【成果】

ワークショップや講演会、街歩きなど、一見地味なイベントであったが、実際に参加すると、なんとなく眺めている日常の風景が、まるで異国のように見えはじめた。いわゆる『異邦人の視点』を獲得する事ができ、イベントに参加する前と後で街の見え方が確実に変化していた。この、自分を異化する体験が非常に面白かった。

観客アンケートでも「自分の町を再発見できた」「こういう芸術があることをはじめて知

ったが楽しかった」と好意的な自由記述が目立つ。参加者の満足度も76.1%と、大変高い。

千利休の見立ての芸術にも通じる、いわば「街中の侘び寂び探し」は、プレゼンター系の系崎公朗氏自身も、1980年代の「路上観察学会」から影響を受けた結果、現在のフォトモ創作につながったのだと語っていた。10年、20年のスパンで、次の後継者が出てくる種類の芸術なのかもしれない。今回88フォトモに深くかわり、感銘を受けた若者達から、将来優れた芸術家あるいはプロデューサーが生まれてくる可能性もあると感じさせられた。

【課題】

- ・展示にもう一工夫する余地があった（たとえば、街並風に造形するとか、モデルになった建物の前にケース展示するとか、あるいは接写ビデオ映像を流したり展示台を眼の高さにするなど）
- ・鳥取県は、著名な写真家がたくさん出ている事から、こうした企画の継続性が考えられる事が望ましい。
- ・米子市が企画している「88フォトモール」との関連性の有無がわかればさらに良かった。

県民企画アートチャレンジ事業 KIHACHI祭り in 米子

平成19年11月3日（土・祝）～4日（日） 米子コンベンションセンターホワイエほか

執筆担当

吉野 立

浜田 あけみ

設定された定性目標及び戦略

定性目標2 文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進します

戦略 劇場全体がひとつが集う街の広場となるための演出を行います

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます

定性目標4 県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行います

定性目標の達成状況

- ・米子市出身の映画監督岡本喜八のスピリットをまちづくりに活かそうと活動しているNPO法人がアートチャレンジした事業であったが、一つの劇場に集中する従来の芸術文化祭と異なり、「まち」を舞台に会場をはしごして文化を楽しむという考えに基づいた発想・企画は斬新なマネジメントとして評価できる。
- ・フォーラム、ジャズライブ、バンドコンテスト、映画・創作フィルム上映、展示から、飲食が伴う企画など内容が多彩で面白く、楽しめた。
- ・いわゆる条件が整った会場での催しではなく、ライブ感覚で商店街やホールのホワイエなどを会場として使い、人が集える工夫と拡がり求めた企画は、観客アンケート結果をみても20代の参加率32.9%、総合芸術文化祭を今回はじめて知ったという人が65.8%などいずれも高い値であり、若者の参加、県民への拡がりなどの点で評価できる。

成果と課題

【成果】

- ・米子コンベンションセンターホールホワイエのジャズライブ、商店街のライブハウスや施設でのフォーラム・ティーチン・映画上映、空き店舗での創作フィルム上映、飲食店での映画鑑賞、書店2階や商店街の店を使った展示など、異なる会場で多彩な催しを企画したこの事業は従来の一つの劇場に集中するという考えと違う視点を総合芸術文化祭にもたらした。
- ・岡本喜八監督の奥さん岡本みね子さんや映画監督利重剛氏らを迎えてのオープニング企画は、参加者も多く、映画への熱い思い、米子の街を元気にしたいという思いが伝わってくるイベントだった。
- ・地元出身のジャズマンを中心としたジャズライブは、ホールのホワイエを会場にしてライブ感覚を醸しだし、内容も岡本喜八ゆかりの曲や映画音楽でジャズの面白みが堪能できた。

- ・若い人の新しい感覚に感動した（60代女性）、今まで見たことのない空間で新鮮だった（20代女性）、新しいものを見た気がした（20代男性）などの感想（観客アンケート）にみられるよう、企画に斬新さがあった。
- ・事業費に占める自主財源比率が59.5%と高いこと、また、新たに実行委員会をつくり鳥取・島根両県から公募した映像作品を上映する第1回米子映像フェスティバルを平成20年5月に企画するなど事業の継続、発展を試みていることなど、自分たちで企画・実行する気概が感じられる。
- ・開催事業の他にも協賛企画として、羽田発のツアー、島根県の足立美術館での喜八特別展開催、足立美術館・植田正治写真美術館・水木しげる記念館入館料割引などを準備するなど事業の拡がりや交流人口の増加を企画した意図は、県外からの参加者が17.9%（観客アンケート）と高いことから評価できる。

【課題】

- ・分散型の展開となって、集客・集中の面で問題があり、昨年度までのような「朝日座」を軸にした集中力・盛り上がりには欠けた。
- ・会場が分散されたことからか、鑑賞者が非常に少ない催しもあった。
- ・会場が狭かったり、鑑賞などの条件が悪いなど、会場選定や設営での工夫が欲しい。
- ・商店街での催しが多かったが、商店街の人通りは少なく地元商店街との関わりが弱かったのでは。
- ・協賛企画などもあったが、個々における効果はどうであったのか定量的な総括も必要ではないか。
- ・企画段階では、異なる会場で多彩な催しを考えるなど今までにない斬新さはあったが、新しい試みであるが故にひとつひとつの催しの内容・運営・参加者等の面での問題点も多くあった。また、鑑賞者を生み出し、賑わいを作る取り組みはまだまだの感がぬぐえないが、早急にその良否を結論つけるのではなくもう少し時間をかけてその取り組みを継続し、企画意図に内容が合致するところまで昇華させて欲しいものである。

県民企画アートチャレンジ事業 ミュージカル「雪の女王」

平成19年11月4日（日） 米子市淀江文化センター さなめホール

執筆担当	植田 丞
	吉野 立

設定された定性目標及び戦略

定性目標 2 文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進します

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます

定性目標 3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

定性目標の達成状況

アンデルセン童話を基にしたミュージカル、地元の劇団の公演とあって期待も高く、子どもから大人まで多くの観客を集め、立ち見や入場できない人も出るという盛況。観客満足度も88.9%と高く（観客アンケート）、鑑賞者を楽しませた。

子どもから大人まで楽しめる内容・演出であり、子どもたちや若者たちがこうした舞台公演に参加したり鑑賞したりすることによって、文化・芸術への関心を高め、理解を深め、将来何らかのかたちで文化・芸術にかかわったり活動したりする人が育っていくのではないかと期待している。

「ミュージカル劇団ゆめ」劇団員だけでなく、声楽専攻者の客演、バレエ、ハンドベルなどのグループが参加する総合芸術として質の高い舞台であり、定性目標及び戦略はほぼ達成したと評価したい。

成果と課題

【成果】

小・中学生を含む若い人(20歳未満29.5%～観客アンケート～)が多く、立ち見も出る盛況であった。

練習を重ねる中で世代間の交流ができ、また長時間の練習に耐えながら発表できた達成感は子どもたちにとって何物にもかえがたい貴重な体験となったのではないかと。

企画、マネジメントいずれもチャレンジ事業にふさわしい公演であり、子どもから大人まで楽しめるミュージカルであった。

【課題】

立ち見が出、入場できなかった人もある等会場の収容能力以上の観客があり、チケットの管理・販売上の問題があった。

地元の劇団の地元での公演には意義があり、多会場・広域展開という事業のコンセプトとのからみもあるが、他地域からの鑑賞者にとっては会場が市外地で交通の便が悪かった。こうした会場での催しについては会場への交通機関確保や公共交通機関の際の会場案内などの検討も必要ではないか。

子どもたちは長時間歌っていると声が出なくなるのではないかと危惧される音楽関係者もいた。また、子どもと大人のコラボレーションで、ミュージカル全体として音量的・声質的に異質なものがあ、ミキシングでのきめ細かい調整が必要ではなかったか。

県民企画アートチャレンジ事業 鳥取サンバ

平成19年11月23日(金・祝) 県民文化会館 小ホール

執筆担当

北尾 勲

押本 昌幸

設定された定性目標及び戦略

定性目標①鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 アマチュアと専門家のコラボレーションや、芸術ジャンル間のコラボレーションにより、良質な作品を創造します

定性目標②文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進します

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます

定性目標③次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

戦略 若者が主導となり企画、参画する事業を展開します

定性目標の達成状況

「サンバをめぐる旅」「鳥取サンバカーニバル」の2部構成。第1部でサンバの歴史や背景を俯瞰させ、第2部でさまざまな曲を披露するなど、見事な演出であった。定性目標1(鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術の創造・発信)の戦略、定性目標3(次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成)の戦略がとりわけ目立った。欲を言えば、定性目標①の戦略の中で、アマチュアのレベルがもう少し高いものであって欲しかった。

実施者アンケートでは89.5パーセント、観客アンケートでは69.7パーセントが満足と回答、手応えのある舞台であった。実施者の中で、「また参加してみたい」が73.7パーセントもあり、継続の可能性を示していた。

なぜ、鳥取でサンバなのか、という狙いもほぼ達成されていたのではなかろうか。

成果と課題

- ・サンバという馴染みのない音楽をここまで深く、楽しく体験させてくれたことは大きい。1部と2部の対比が鮮やかであった。オブザーバー松本正嗣氏、菊池ひみこ氏など、プロの存在が大きかったが、それに呼応する県内バンドの演奏も活気に満ちていた。レベル的に今一歩とい

- う感もあったが、これは回を重ねるごとに高まって行くものと思われる。フィルムケースを使ったシェイカーの演出はグッドアイデア。演奏者と会場が一体化する役割を果たした。
- ・会場入り口の展示「鳥取とブラジルの交流展」は単に展示してあるだけで、これと言った案内がなかった。舞台とどう関連づけていくか、どんな内容にするか、全体的なプロデュースが必要不可欠と思われる。
 - ・進行に若干問題があった。特に終了が30分も延びていたのにプログラムにないアンコール曲が流れるなど、間延びする場面も。タイムキーパーはしっかりとチェックする必要がある。

県民企画アートチャレンジ事業 鳥取オペラ・ルネサンス
平成19年11月24日(土) 県民文化会館 小ホール

執筆担当	押本 昌幸
	北尾 勲

設定された定性目標及び戦略	
定性目標1	鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します
戦略	アマチュアと専門家のコラボレーションや、芸術ジャンル間のコラボレーションにより、良質な作品を創造します
定性目標2	文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します
戦略	地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進します
戦略	企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます
定性目標3	次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります
戦略	若者が主導となり企画、参画する事業を展開します

定性目標の達成状況

はじめに、言わずもがなではあるが、観客アンケートが実施されなかったことは理由のいかんを問わず致命的な評価口スであることをあえて指摘しておきたい。全般に評判がよかっただけに、なお一層である。

- 定性目標1** 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します
- アマ・プロのコラボレーションとは言うものの、どこまでがアマそしてプロなのか判別しがたいところもあった。鳥取オペラ協会にはアマもいるが音楽専科もいるわけで、一概には言えない。ではあるが、オペラ協会を中心としたところのプロ・アマのコラボレーションはよく出来ていたと思われる。が、専門家も指摘しているように、バックの合唱であるとか、ソロのパートとか問題点もないわけではない。
- 他ジャンルとのコラボレーションでは、朗読・ダンシング・舞踊・ミニオーケストラなどと今までにない協力態勢が組まれたことは評価できる。
- 全般にメインはよくできていたと思う。主役にも良い素材を見つけ出したことと思う。ただ、プロ・アマ及び他ジャンルとのコラボレーションについて言えば、メインほどに十分な仕上げに到っていなかったのではないだろうか。低予算の中、パワーポイント等の利用も良い知恵ではあったが、字幕の誤字の多さは目についた。そういった細かなところまでの配慮が足りなかったのかスタッフが足りなかったのか、出来上がりが良いだけにあら捜しをしてしまうのである。
- また、ここでもPAの粗さを感じた。完成度の高い朗読者に、あの小ホールで拡声の必要があったのか。まさか録音のためではあるまい。
- 杉谷代水・高木東六へのアプローチ、しかも創作オペラへの注目は新鮮であった。東六の「シャンソン」をいうなら、「星の界」の代水(も少しメジャー)の紹介もあればよかった。
- 定性目標2** 文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します
- 戦略 (地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントの促進)については、委員・事務局のアンケートをみてもこのアートチャレンジに関しどの程度運営委員会が関わったのかはわからない。が、今年の東部地区企画運営委員会全体のありようからすれば、ある程度の

協力態勢が出来ていたのかなという想像は出来る。地方大学を取り込んでいくことも、その能力があればこそ可能であろう。

戦略（企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などへの公募制の導入）については、この企画では公募制云々はわからない。が、出演者等ではあまりなかったのではないか。そうそう可能であるとも思えないが。しかしながら、企画について学生が応募し、やり遂げたことは今年の最大の収穫であろう。

定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

今年のアートチャレンジ事業最大の収穫は大学生のマネジメントへの参画であろう。そして、ある程度結果もついてきている。もしかしたら、その成功の影には東部地区企画運営委員会のフォローがあったのかもしれない。いずれにしても地域と大学との連携は大切なことであるし、今後の継続も必要なことである。学としてのアートマネジメントが地域に還元されればこんなすばらしいことはない。

成果と課題

成果はなんといっても、大学生のアートマネジメントの実践参画であろう。細部に粗さは目立つものの、知恵というか、必要最低限の課題をクリアする能力は学生のものである。そして、それに地域が応援態勢を敷いて見守ったであろうことにも、地域と大学との「コラボレーション」として成果を見ることが出来ただろう。もちろん、この背景には鳥取大学そのものの応援態勢も見えてくる。

アートマネジメントの必要性、理屈は理解できても、具体的にどのような実践をなすのか、というところでの、県民に対するフォローの必要性が露わになってきている中で、学生の参画実践を通してマネジメントのフォローのあり方を確立していくのも今後の課題といえるかもしれない。

しばらくは、鳥取大学の協力を得て、学生の参画するアートマネジメントのフォローの仕方の実践を学習し、地区企画運営委員会が学ぶことが必要である。

再演の期待もある。アマがアマで終わるのは一回性とその達成感の快感にある。しかしながら再演がアマに不可能なことの一つの要因が、たぶんアートマネジメントにあるのだろう。そういった意味でもアートマネジメントの出来が再演を可能にするのだろう。

さらに、そのアートマネジメントで再演等が可能になってくれば、県外への進出も可能になってくるだろう。期待は大きい。

県民企画アートチャレンジ事業 邦楽風土記

平成 19 年 11 月 25 日（日） 県民文化会館 小ホール

執筆担当

北尾 勲

浜田 あけみ

設定された定性目標及び戦略

定性目標1 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 アマチュアと専門家のコラボレーションや、芸術ジャンル間のコラボレーションにより、良質な作品を創造します

戦略 伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業を展開します

定性目標2 文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進します

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます

定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

戦略 若者が主導となり企画、参画する事業を展開します

定性目標の達成状況

わらべ唄から民謡まで、多彩なステージであった。創作邦楽集団「夢玄」や舞踊の「満福」チームなど、プロとのコラボレーションもあって、舞台に奥行きを与えていた。定性目標1（鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術の創造・発信）、定性目標3（次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成）などにかかなり肉迫していたのではなかろうか。第1部「日本伝統芸能のあけぼの」で、山陰両県出土の古代笛や古代箏を復元し、その音色に“祈り”を見出し、第2部「邦楽風土記」で全国5カ所を巡り、第3部「貝がら節ニューバージョン」「米子八景」につなぐ、といった構成。いわば横糸と縦糸を駆使することによって、邦楽の魅力を立て体的に示そうとしたやり方だが、いささか欲張りすぎた感がある。観客アンケートとしては92.5パーセントが満足という反応を示していたが、実施者アンケートでは満足度32.0パーセントと低く、不満が24.0パーセントもあった。このあたり、邦楽の難しさだろう。それと、アートマネージャーが各出演団体をまとめきれていなかったということだろう。

成果と課題

- ・邦楽の生の演奏に接する機会は極めて少ないが、こうした試みは地味ながら、きっと実を結ぶものと思われる。若者や子ども達の参加、郷土に材をとった作品の披露など、その意欲を評価したい。殊に若手舞踊家による演技指導、一流演奏家による雅楽鑑賞など、日本の伝統芸能の継承と次世代の育成に役立つものと思われる。また、復元古代楽器の演奏も目新しく、楽しかった。
- ・進行や舞台転換がもたついて、いささか興ざめ。そのため、全体的に伝わって来るものが弱まった感じ。空白が10分間もあるのは問題。ナレーションや音楽を入れるなど、工夫がほしかった。また、全体を流れるストーリー性も明確にした方が良かったのでは。プログラムを記載したり、ナレーションで説明するなど。「米子八景」についても、何らかの説明がほしかった。
- ・プログラム終了後の「トーク」は予告なし。しかも、30分以上も続くなど、折角の感動が半減した。せめて5～10分くらいにして欲しかった。タイムテーブルに対する感覚が極めてルーズだと思った。猛省を促したい。
- ・電子楽器の使用でPAの使用が当たり前になったが、想像以上に響いたので、今回はマイクの使用は不要だったように思う。
- ・いずれにしても、アートマネジメントの重要性を今回ほど感じたことはなかった。アートマネージャーの育成を含めて、アートマネージャーのあり方を根本から考える必要があるだろう。

鳥取県青少年郷土芸能の祭典2007

平成19年11月4日（日）米子コンベンションセンター 多目的ホール

執筆担当	南川 理恵
	植田 丞

設定された定性目標及び戦略

定性目標1 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業を展開します

定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

定性目標の達成状況

定性目標1 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

鳥取県の各地域で、古くからの地域文化が「親から子へ」「先輩から後輩へ」と継承されていることが確認できるものであった。また、他団体とのジョイント公演や、文化交流を続けているところのものを取り入れ、新たな文化芸術を創造している団体もあり、幅広い文化芸術に触れることができた。目標は達成したといえる。

定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

多彩な郷土芸能が繰り広げられ、鑑賞者を楽しませた。保育園児、小・中高生、高校生、社

会人など幅広い世代の人たちが舞台上で演じ、観客の入りもよく、その年代層も多様であった。鑑賞時間が長かったが、休憩時間を利用して「貝がら節」の練習をし、フィナーレで会場全体で踊るという取り組みもあり、全体的に盛り上がりを見せた。目標は達成したといえる。

成果と課題

【成果】

- ・各地域が様々な形で、古くからの地域文化を継承している様子を感じることができた。完成度は色々だが、それ以上に「地域の温かな絆」が見られ、価値ある事業であったと感じる。また、郷土芸能に詳しくなくても興味が持てるようなわかりやすい説明と、スクリーンの活用で、各団体の普段の様子や熱い思いを知ることができ、次回への期待感が増した。
- ・「淀江さんこ節」は地元の小中学生と高校生のジョイント公演で、会場から手拍子も起こって盛り上がった。郷土芸能部としての活動の成果である。
「因幡麒麟獅子舞」は一転して静かな獅子舞だったが、こちらも高校芸能部の活動の成果であり、こうした形で地域文化の継承がなされていくことは好ましいことである。
創作郷土芸能「尼子再興～勝田浜合戦～」は、朗読を交え30人による大・中・小20数台によるダイナミックな太鼓の響き、静かな舞いで尼子再興への武将の熱い思いを表現した。動・静・動と表現に変化をつけ、朗読と映像による表現と相まって「新しい文化芸術の創造」への意欲が伺えた。
「米子盆踊り」は、途絶えてしまっていたが今年復活を果たした踊りを取り入れ、幅広い年齢層ながらも素朴で温かい雰囲気大切にされていた。
「ふるさと日南の風」は、地域有志で立ち上げ6年目。少人数ながら迫力があり、レベルの高さに驚いた。
「荒神神楽・八重垣能」は、高校生ながらもダイナミックな演技に感銘を受けた。

【課題】

- ・「白波五人男」は、保育園児から小学6年生までの16人の子どもたちによる法勝寺歌舞伎、「三徳山子ども行者太鼓」は女子中学生7人による演奏。郷土芸能・文化を次世代に継承し、活動を育成していく課題も見たように思う。
- ・まだまだ知らない県民が多く、特に身内以外の若者の姿はほとんどなかった。「郷土芸能＝難しい」というイメージを払拭できるような、学校単位での宣伝の工夫などが求められる。観客アンケートでもあきらかだが、年輩層（60代以上）は56.8%と多いが、若い年代層（30代以下）が15.9%と少ない。若い年代層の鑑賞者の拡大が課題といえる。
- ・公演中の観客の出入りが目立ち、鑑賞の妨げになることがあった。せめて演目の切れ目に入入りするよう誘導が必要（観客アンケートでも指摘されている）。また、親子連れの姿もあり、託児サービス等何らかの工夫が必要。どちらの配慮も、各演目が持つ動・静の雰囲気を守るために必要なことである。

鳥取県出身のアーティストによるコンサート こどもの楽園

平成19年11月25日（日） 県民文化会館 梨花ホール

執筆担当

小谷 幸久
南川 理恵

設定された定性目標及び戦略

定性目標1 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 アマチュアと専門家のコラボレーションや、芸術ジャンル間のコラボレーションにより、良質な作品を創造します

定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

定性目標4 県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行います

定性目標の達成状況

定性目標1 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

総勢31名編成のオーケストラの中に15名の県内出身の奏者がいるということは素晴らしいことだと思う。その中にはすでにプロ的な活動をしている人もいるが、年々このオーケストラの演奏レベルが上がっていることを大変喜んでいる。宮川彬良氏の強引とも思えるアレンジでも無難に表現できるところは、この企画のねらいを充分クリアしていると思う。

定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

今回のオケのメンバーも次世代を担う若者の一人ではあるのだが、前回の「こどもの楽園」から続いている、「音の動物園」の企画はおもしろい。実際に楽器に触れてみて音が出せた子どもの笑顔は何物にも代え難いものを感じた。多くの子どもが列を作って、どきどきしながら待っている姿、それを嬉しそうに眺めている親。本当にほのぼのとした一時であり、大変熱くなった会場であった。この体験は、子どもにとって大きな財産となり、主催者が目指す「心豊かな人間性」の育成に大きく役立っていると思う。

定性目標4 県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

1部「音楽入門」は、パーセルのメロディーを使いながら、プリテンの曲とは違い、いい流れであった。楽器紹介の域を通り越し、各楽器の音が一つずつ重なり合うことにより、深い響きを醸しだし、その作業によって素晴らしい音楽が生まれてくることをうまく教えていたと思う。このことは、現代社会の子ども達の生き方を示唆し、パソコン等で一人の世界に浸るのではなく、他人のことも考えながら、周りの人たちと共生していくことの大切さを教えているようであった。このような感性を持った子ども達の中には、いじめも差別も消滅する世の中になるような気がした。そうあって欲しいものである。

2部のベートーベンである。宮川彬良氏の得意分野で、非常におもしろく構成されていた。「運命の扉を叩く音」のモチーフが、ベートーベンの音楽の主たる要素だとの位置づけ、それに沿って流れが展開していった。誰でも知っているモチーフが、「エリーゼのために」も「エグmont」にも生きていて、全く別な音楽「マンボNo.5」にも活かされているという仮説には、目を見張るものがあり、ストーリーの流れには全く違和感を感じなかった。

この様に、ステージの進行をおもしろおかしくすることで、聴衆の心をぐいぐい引き込んでいく手法は、多くの観客を魅了したと思われる。

成果と課題

【成果】

「定性目標の達成状況」で評価したように、その目標が達成されたように思う。

県出身の演奏家達が加わった管弦楽団の演奏も年々充実し、多様な角度からの宮川彬良氏のアレンジでも立派に反応され、指揮者の要求する音楽作りが出来ていたように思う。

「音の動物園」と称して、子どもに対して「楽器」への興味付け・「音楽」への興味付けが見事に絡み合い、当日の演奏会が聴衆にとって有意義になったことは素晴らしい。前々から県下3地区といわず、より多くの地区で開催することが出来ることを願っていたのだが、次年度は米子地区開催とのこと、大いに結構である。よりパワフルな演奏会になることを望む次第である。

【課題】

「こどもの楽園」と題してあるのだが、児童の参加が多かった。ターゲットはどうであったであろうか。個人的には、中学生、高校生までターゲットにする必要はないだろうか。「音の動物園」の参加は現状でも良いと思うが、演奏会の方は中・高生も充分楽しめる内容だし、管・弦楽器の実働部隊はむしろこの年齢ではなかろうか。そういう意味でもどかしさを感じた。音楽と向き合う原点や、より豊かに表現していくための気付き等、得られるものは多々あるであろう。学校単位での宣伝の工夫など、更に求められる。

「定性目標の達成状況」の定性目標4で大きく評価したのであるが、ベートーベンの扱いの中で大きく不満が残ったことがある。「運命の扉を叩く音」のモチーフが、ベートーベンの音楽の主たる要素だとの位置づけをしたことはおもしろいし、そのことが確かに色々な曲に活かされていて、「マンボNo.5」の異質な曲が登場しても違和感はなかった。合唱団を登場さ

せる口実なのか不明だが、宮川彬良氏作曲の「空のわすれもの」が何故登場するのか、疑問が残った。

決定的なダメージは、何故「マツケンサンバ」なのかと言いたい。氏の代表作でお客さんを喜ばせたい意図は読み取れるのだが、良くないと思った。このため今まで進めてきたベートーベン特集が吹っ飛んでしまった感があった。ましてや、ベートーベンがいきなり「サンバ」を踊り出した下りも問題を感じた。

子ども達はベートーベンの人間像をどう理解すればいいのかとまどうだろう。更には、ベートーベンがサンバを踊っていたことのみが印象に残ったとすれば、今回の企画はどうすればよいか、考えてしまった。

「マツケンサンバ」がなくても、充分演奏会が成り立ち、子ども達に夢を与える素晴らしい演奏会ただけに、残念な気持ちで家路をたどった者は私一人ではないと思う。

西部地区ワークショップ・フリースペースイベント いつもの「まち」で「文化」する
平成 19 年 11 月 1 日（木）～4 日（日） 米子コンベンションセンターほか

執筆担当	植田 丞
	吉野 立

設定された定性目標及び戦略

定性目標1 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業を展開します

定性目標2 文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます

戦略 若者が参画できる環境を整えます

定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

戦略 若者が主導となり企画、参画する事業を展開します

定性目標4 県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

戦略 誰もが文化芸術を鑑賞、体験できる機会と環境を整えます

戦略 多様な文化芸術活動を選択できる多彩な事業を実施します

戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行います

定性目標の達成状況

ポスト「朝日座」事業を模索し、「いつもの『まち』で『文化』する」というコンセプトで多彩な事業を多会場、広域展開した試み・意欲は評価したい。多くの事業で子どもや若者たちが積極的に参加し、活躍し、今後への展望を切り開いた。ただ、分散展開型の文化祭となり、場所的・時間的に「文化」のはしごがしづらい側面もあり、昨年度までの「朝日座」を軸にした集中力、盛り上がり、賑やかさには欠けた。模索、試行錯誤の段階かと思うが、事業のコンセプトについて幅広い論議が必要ではないか。

「生田長江企画展」が昨年日野町で取り組まれた「とっとり文化芸術探訪」を積み上げ、米子市で開催されたことや、米子コンベンションセンター・米子市淀江文化センターで開催されたフリースペースイベントの「ミニステージ」などは、地域で地道に活動している団体の企画であり意義深い好企画であった。

ワークショップ・フリースペースイベント・展示は、全般的に「高い敷居ではなく気軽に参加できる」(実施者アンケート)事業が多く、集客上の課題はあるが文化活動の幅を広げ、定性目標を達成した。

成果と課題

【課題】

「生田長江企画展」(淀江作業所)淀江さんこ節披露ほかは地域で地道に活動している団体による好企画であった。多くの文化団体などがこうしたイベントをもっと積極的に企画し、

総合芸術文化祭に参画してほしい。

フリースペースイベントの「ミニステージ」は舞台と客席が近く、親近感をもって楽しんでいた鑑賞者が多かった。「太極拳」は参加者に体験させて変化をつけ、「鬼面太鼓」は地域文化が次世代に引き継がれている姿を見ることが出来た。また、各ブースがそれぞれ展示に工夫を凝らし、「誰でも気軽に体験できる」イベントであった。フリースペースイベント・展示の参加者の年代はほぼどの年代もまんべんなく参加（観客アンケート）していて、若い男性の参加も多くなった。

【課題】

「生田長江企画展」の「ギャラリートーク」の参加者は年輩の人が殆どであり、長江の生きた時代を踏まえて現代的意味を探った内容であっただけに次世代の若者たちにも参加してほしかった。こうした企画に若い年代層をどうひきつけるか。開催曜日・時間帯・場所・PR等について検討が必要である。

日野町での「Night Train Live vol.7」は、事業の広域展開という観点では評価できるが、開演時間の遅れや鑑賞者への配慮など運営上の不手際が指摘されており（観客アンケート）検討が必要である。

フリースペースイベント・展示については、「タイムカプセルづくり」は親子連れでにぎやかだったが、見る人・体験する人の少ないブースが目立った。市民へのPRがもっと必要であった。また、ホワイエは「音響的にはやりづらいところがあった」（実施者アンケート）という声もあり、検討が必要である。

中部地区ワークショップ・フリースペースイベント ええじゃないか中部！今 甦る ふるさとのドラマ 平成19年11月8日（木）～11日（日） 倉吉未来中心ほか

執筆担当	押本 昌幸
	萩原 俊郎

設定された定性目標及び戦略

定性目標①鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

戦略 伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業を展開します

定性目標②文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます

戦略 若者が参画できる環境を整えます

定性目標③次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います

戦略 若者が主導となり企画、参画する事業を展開します

定性目標④県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

戦略 誰もが文化芸術を鑑賞、体験できる機会と環境を整えます

戦略 多様な文化芸術活動を選択できる多彩な事業を実施します

戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行います

定性目標の達成状況

定性目標①鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します

ワークショップの「倉吉いか」「倉吉餅」「中部窯」「朗読」及び「ダブルストーリー関連展示」「写真展」「絵馬展」などは確かに「伝統」「郷土」を継承していたにちがいない。また、「似顔絵」「ガラスアート」「ジェンベ」なども、指導者の質により「伝統」とは違った新たな体験ができたであろう。ただ、並べて目的意識を持った者には問題ないにしても、通行者に対する誘導、あるいは展示の工夫については今一步であったように思われる。ここの戦略には入っていないが、ワークショップ・フリースペースイベントも指導者・プロとの関わりの深いものは質の担保がなされている、と感じられた。

フリースペースイベントについては「伝統」性はあまり感じられなかった。「貝殻節」等の唄が2グループであったがいまひとつ加工消化がなされていなかったと思う。「団塊」組の演

奏は彼らの往年の活躍をうかがわせるもので、新しい「地域文化」になるかもしれない、と思わせた。

定性目標②文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

戦略（企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などへの公募制の導入）については、企画・出演者・スタッフとも公募性うかがえるが、一方で公募性ゆえの質の担保がきになった。

東部地区の場合、この質の担保と、公募性による機会の確保の両方が担保されていたが、そのような工夫が中部でも必要と感じた。

戦略（若者が参画できる環境の整備）については、「若者」をどこまで見るのか、鳥取県中部が「農村地区なのか、田園地区なのか」わからないがいずれにしても「若者」の少ない中で、どう確保するのか。場合によれば「高校生」等も取り込むのか。まだ若者の参画は不十分だと言えそうだし、自己評価（事務局）の評価もそれに近かった。

定性目標③次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

戦略（世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業の実施）については、ワークショップは「体験型事業」として満足度も高い。が、「広さ」はどうだろうか。「朗読」「ジエンベ」あたりは、体験と鑑賞を共通にしながら交流が可能であったと思われる。ただ、ワークショップそのものの、会場での存在感は薄く、もっと認知されるようなロゴマークなりアイキャッチャーが必要に感じられた。

戦略（若者が主導となり企画、参画する事業の展開）については、少し大人しく感じられたがどうだろう。観客動員の点でも疑問が残った。また、音楽で言えばクラシック系が少なく、その分骨格が弱くも思えた。

定性目標④県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

戦略（誰もが文化芸術を鑑賞、体験できる機会と環境の整備）については、鑑賞の点では、先ずフリースペースイベント出演者自身が身内の観客を動員しなければと感じ、また、出演者もよい機会なのだから他のジャンルの鑑賞をし、自らの好奇心をもっと旺盛にする必要がありはしないか。ただ、質の担保をどう保証するのか、これが出来ないと学園祭・公民館祭になってしまい、鑑賞に堪えない。「総合芸術文化祭（総芸祭）」はせめてそのあたりの質を担保されたい。発表環境については決してよいとはいえないが、そのためにこそPAがあるのであり、PAの質の向上・工夫も図っていかれたい。

戦略（多様な文化芸術活動を選択できる多彩な事業の実施）については、多様性ということでは、今年、中部地区が主事業のため、フリースペース・ワークショップに十分な手が回っていない感があった。また、「総合」なのであるから「動員力」の点からも「文化講演会」などの同時企画も考えられてよいと思う。

戦略（鑑賞者が文化芸術をより楽しむためのアウトリーチ活動の実施）については、「アウトリーチ」の必要性は認めるが、誰がその主体となるのか、「出演者」のみでは無理であろう。今回の出演者の中には定期的に行っている者もあるが、そのシステム作りはどうするのだろうか。また、逆に各高校学園祭等に「スカウト活動」も必要なのではないか。

成果と課題

少なくとも、昨年今年と見る限り、中部地区の中でも、地区全体にまだ認知されていない一定の水準を保つ「郷土芸能」がある。それぞれ発掘はなされているのだろうが、それがファイル化されていないのではないかと。質の担保をなされた中ではあるが、ワンパターンではあっても「伝統」「郷土芸能」は担い手が変化するなかでの「質の維持」に魅力がある。その晴れ舞台を、公民館レベルではなく中部地区・県全体を目指して欲しいし、そのレベルでなければならない。

ワークショップ・スペースイベントの評判を呼ぶものは、必ずプロが関与している。他の部門での「目標」あるいは「戦略」ではあるのだが、やはり「(セミ)プロ」「アマ」のコラボレーションはここでも必要であろう。質の担保と、異なるジャンルへの関心づけには(セミ)プロの力を借りる必要がある。出来れば「戦略」の見直しを求めたい。

また、新しいものの発掘では、可能性として「短大」「高校」に求めるしかない。とくに高校の「学園祭」のエネルギーにはすばらしいものが在り、「学園」のレベルを超えたものがあったり

する。そういったものを、主催者側のプロデューサーがスカウトし発掘することがあってもよいのではないだろうか。

また、ジャンルも不問である。近年高校には「文芸部」が存在しなくなっている。芸術系サークルの高いレベルの発表の場として「総芸祭」があってもよいし、更に「県」のレベルを超えたものは「国民文化祭」なり、それに近いものへの公費派遣もあってもよい。

そして、そういったものへの関心については体育系に比べれば低い。がないわけではない。「広報」の重要性、効果が問われる。その中で、県でも少しその兆しが見られるが、全国一、二の普及率を誇るCATVの活用である。CATVのローカルチャンネルの視聴率はそれなりにあるし、「県議会中継」もあることを考えれば、著作権が関わってくるにしても「総芸祭」のメインの（録画）中継の県域放送も可能であるし、地元出演者の取材はこれも効果的であり、かつそれが「総芸祭」なのだ、という認識も広がる。説明抜きの「広報」活動である。かつ、主催者側の直接的経費なしに、である。

それと、フリースペースの「劇場空間」としての音響機能は劣るわけであるから、そのためのPA技術の工夫加工が必須であり、これは、PA技術者のみでなく、主催者側も勉強して可能な限りの音響条件は満たすべきである。知らないことにより、PAのオペレーターに注文できないのが現状でなかろうか。

また、「地域文化」がメインのテーマではあるが、「地域」にだけにこだわり、文化芸術の普遍性が欠如しないように気をつけないと「地元もの」の評価を誤る危険性があるように、特に今回の「倉吉・ダブルストーリー」では感じたので、これは今後とも心しておきたいことである。特に芸術ならば。

東部地区ワークショップ・フリースペースイベント 文化の森のファンタジー
 平成 19 年 11 月 1 日（木）～4 日（日） 米子コンベンションセンターほか

執筆担当	田中 玄洋
	押本 昌幸

設定された定性目標及び戦略 定性目標1 鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します 戦略 伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業を展開します 定性目標2 文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します 戦略 地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントを促進します 戦略 劇場全体がひとが集う街の広場となるための演出を行います 戦略 企画運営委員・出演者・スタッフ・作品企画などに公募制を取り入れます 戦略 若者が参画できる環境を整えます 定性目標3 次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります 戦略 世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業を行います 戦略 若者が主導となり企画、参画する事業を展開します 定性目標4 県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります 戦略 誰もが文化芸術を鑑賞、体験できる機会と環境を整えます 戦略 多様な文化芸術活動を選択できる多彩な事業を実施します 戦略 鑑賞者が文化芸術をより楽しめるためのアウトリーチ活動を行います
--

定性目標の達成状況

定性目標1鳥取県独自の地域文化を継承し、新しい文化芸術を創造・発信します
 麒麟獅子をオープニングに持ってきたことで郷土芸能を地域へ発信する取り組みはできたと言える。継続することで、麒麟獅子＝地域文化発信の試みということが定着できるのではないかと。フリーステージには多彩な団体が参加したことで、文化の発信を行ったといえる。ただ新しいものであるかは、鳥取にとって新しいものであれば、フリースペースで可能であるが、世の中に発信する新しいものはフリースペースという空間で担うべきものではないと感じた。フリースペースイベントはより身近な文化を発信して県民の文化参加を促すものであり、世の

中に発信する新しいものは鳥取の独自性が発揮されるものであるため、アートマネージャーを置くなどにより、単独の企画として行なうべきである。

定性目標²文化祭の企画、運営、創造活動への県民の積極的な参画を促します

資料としていただいた、集合写真が物語っているが非常に運営はスムーズに行われていたといえる。例年に比べ、参加者が滞留しており常にホールに人がいるという状況の中、委員・出演者・ボランティアが非常に居心地のよい空間を作り次年度につながる満足感を演出していたといえる。

一方で、マネジメントという点においては、参加団体のコンセプトをいかに来場者に伝えるかなどを学ぶ仕組みが不足していたので、結果として質が問われるものもあった。マネジメントの部分でバックアップ体制を考慮する必要があるが見られる。

運営委員が別事業に関わる割合と会場の運営がリンクしている。事業担当委員はなかなか当日の運営参加は難しいため、人的不足が生じた。

定性目標³次世代を担う子どもや若者の文化活動者の発掘と育成を図ります

参加・体験は各世代が楽しめるような取り組みや、小学校・大学などを連携させることにより若い世代が参加できる仕組みとして機能していた。特にワークショップの参加者アンケートでは各世代が満遍なく集客されており、若者の参加を促したといえる。

鳥取大学・鳥取環境大学の大学生、鳥取東高校生と若者が主体的に参画していたことが見てとれる。

定性目標⁴県民の文化芸術を楽しむ感性を養い、鑑賞者の開発と拡大を図ります

まず、メニューが多く用意されることによって、身近な文化活動に触れる場になった。また団体ごとが連絡を取り合って次の事業参加につながったという報告は一つの成果といえる。ワークショップも楽しい雰囲気が出ており、参加を促す形になったといえる。

展示関係の発表が少なかったことが懸念される。

託児はひとつ重要な試みである。広報が不足し、利用者が少ないようであったが継続することが重要である。

既存の文化団体との連携や発表の場として活用してもらうことなど、各自に負担の少ない形での連携が必要とされる。また、周辺施設（県立博物館など）や周辺市町村（旧鳥取市以外）への連携や波及効果など、次年度より検証する必要性が問われている。

成果と課題

【成果】

成果は3点。

- (1) 委員に運営のノウハウの蓄積があること
- (2) フリースペースに人が滞留するようになったこと
- (3) ボランティアを含めて当日の運営が楽しくできていること

フリースペースのイベントを運営する側の体制が整ってきて、お客様への認識も向上してきている段階といえる。次はお客様をいかに巻き込むかである。

【課題】

本質的なもの

ワークショップ、フリースペースイベントの位置づけを再確認する必要がある。

事業の性質上、多くの定性目標があげられる。しかし活動が多用であり参加者も多いので、評価としては「大体満たしている」という状況に陥りやすい。運営側にマネジメントの意識が芽生えたのであれば、事業における重要な目標をより明確にしなければ、評価の意義が問われる。そのためには評価軸を絞り込む必要性が出てきたのではないか。

本事業を「県民の文化の入り口」と位置づけるのであれば、「身近な文化との出会いの場」「既存団体の発表の場」「団体の成長の場（アートマネジメントを学ぶ場・部分的にプロ（専門家）とコラボレーションして技術向上のキッカケの場）の機能が考えられ、県民にとっては文化活動参加のキッカケと成長の場（初期）と位置づける認識されることでできること、見えてくるものがあると感じる。

現在の定性目標で言えば²・⁴に特化することも検討できるのではないか。

* 課題 *

活動参加への流れを作る。現時点では、既存団体の活動まで県民をいざなう取り組みまではされておらず、いいなと思った活動が実際どこで行われているのか、誰に連絡したらいいのかなどをまとめて発信できるようにすると、参加団体にとってもメリットになるのではないかと。

団体を成長させる仕組み。参加団体にマネジメントを学ぶ機会も提供はできていないので、その部分を考える必要がある。情性で発表せず、観客が感じた部分を伝える仕組み（部分アンケート）それを改善するための方法（委員による指導など）を提供する仕組みが必要である。

運営体制を強化。事業に参加してしまう委員は当日参加が難しいので、地区のマネジメントを専門に行う係りがいたほうが円滑に回る。ただ負担の面で考えると委員でやれる内容なのかは再考の必要があり、専門にアートマネージャーを活用するのも手である。ボランティアは継続して参加してもらおう仕組みを構築するなり、文化振興財団のボランティアとの連携を組むのも必要である。

専門家評価

主な事業について、専門家による芸術性・マネジメントなど多様な観点からの評価を実施した。(専門家による評価を原文のまま掲載)

倉吉・ダブルストーリー ～淀屋と八賢士の世界～ 【第1部】淀屋の世界

平成19年11月11日(日) 倉吉未来中心 大ホール

倉吉・ダブルストーリー～淀屋と八賢士の世界～「第1部 淀屋の世界～淀屋再興物語」の「芸術性の観点からの評価」

平野 英俊

はじめに

「芸術性」といっても、その公演の背景を知らないと評価も的はずれになりかねない。まず、この公演の性格、特殊性を述べなければならない。

県庁が音頭を取っての「県の総合文化祭」という「祭」。これが、県庁の文化振興の政策の大きな位置を占めている事業であり、その一端のプロジェクト事業が、この公演で、県の中部地区(倉吉市中心、人口約11万人)を主に対象としていること。つまり、江戸時代でいえば伯耆の国、その東部の倉吉市周辺という、地域の文化振興を目的としていること、が前提にある。

また、この文化祭の定性目標に「アマチュアと専門家のコラボレーションや、芸術ジャンル間のコラボレーション」「伝統芸能や郷土芸能など、鳥取県の地域文化を継承する事業」がうたわれている。

この公演は、その定性目標にそった「舞台芸術の創造」なのである。

創造の土台づくり

県は、中部地区の文化芸術の拠点として、平成12年11月「鳥取県立倉吉未来中心」という文化会館を建てている。多目的というが、大ホールは1,500人収容のオペラ劇場である。巨大な木造を使ったホワイエは威容な佇まい。所在地の倉吉市の人口は5万人、その周辺を加えても、文化会館を稼動良く、運営していくのはかなり難しく思える。この文化会館を活性化するためにも、県は、この公演に対し、企画、広報、運営、人材養成などの面で、リーダーシップをとり、実行委員会を組織して立ち上げ、盛り上げているのはよく解る。

「ダブルストーリー」の「第1部 淀屋の世界」では、倉吉市で毎週末、歴史講談を催している「倉吉談語の会」の講談、米子市を中心に活躍する「とっとり邦楽合奏団」の邦楽が「コラボレーション」の対象に据えられている。地域の「伝統芸能」という文化芸術資源の活用を意図しているのだろう。

日本の舌耕芸の流れの江戸近世の寄席芸の「講談」と邦楽といっても、江戸近世の「箏曲」という二つのジャンルの「コラボレーション」は勇気のいる発想である。しかも、ともに、小さな空間の文化芸術のもの。前者は劇場スタイルだが、後者は舞台空間での上演は現代になってからのもの。「未来中心」の大きな劇場に音がなじむのだろうかと思う。

全国的にそうなのだが、県市町村の行政は、アーツマネジメントのアーツとしての「伝統芸能」をどう考えているのか、よく解らない面がある。

「伝統芸能」というと、江戸時代まで、公家文化の「雅楽」、武家文化の「能楽」、都市中心に発達した町人文化の「歌舞伎・人形浄瑠璃」、その他に「演芸」、地域に密着している「神楽」「風流」など様々で、寺院、神社はじめ、大名家、民家など多様な場と舞台で文化芸術はあった。それぞれの芸能の歴史的な流れや本質を考えないで、無暗に、大きな劇場の舞台上げて上演して、「伝統芸能は有難いもの」と押しつけては観客はついてこないし、育たない。その本質を見極める日常がない。

題材と脚本

倉吉市に、江戸時代の大坂の豪商「淀屋」の番頭として働き、「淀屋再興」に貢献した牧田仁右衛門の後が残した「旧牧田家住宅」が残り、「淀屋の墓」が倉吉市大蓮寺にある。資料などは

「淀屋研究会」などで集められているが、多くはないとのこと。倉吉市民にも充分伝わっていない事実という。倉吉を繁栄させたのは「千刃扱き」というのはよく知られている事実だが、「千刃扱き」が、牧田仁右衛門の発明という事実も、今回の公演で、倉吉市が再認識したというから、「地域再認識」という点では恰好の題材であったといえる。

脚本は「倉吉談語の会」で講談を指導する石上瑠美子に委ねられた。石上は、松戸市在住だが、鳥取名産「ナシ」を通して鳥取県とは縁があり、NPO法人松戸市民劇団理事長という役職で、演劇にも通じている人という。

脚本は、主語り（石上） 脇語り（脇坂幸司）が、歴史的事実、状況を語り、それをサポートするように感情や状況を邦楽が演奏し、短いシチュエーションは、扮装をした演じ手がドラマを演じる。

しかし、「コラボレーション」という発想は、新しいようで、日本では古い事実がある。この公演の成功の是非を脚本に委ねるのは気の毒な話といえる。石上が充分腕をふるえる環境にはなかったと判断する。

内容の展開

二場の構成で「ステージ」としては「淀屋辰五郎伝、豪商への道程」と題して、大坂の豪商・淀屋辰五郎の四代目、五代目を中心にした物語を描く。江戸時代の始まり江戸中期、倉吉出身の牧田仁右衛門が番頭として登場する。「ステージ」は「牧田淀屋と淀屋清兵衛」。大坂と倉吉で再興を目指す淀屋の挫折と成功の物語。ここで、倉吉の名を全国に馳せた稲の脱穀をするのに使う道具「千刃扱き」の話がクローズアップされる。

見事、復興を遂げた「淀屋」ではありますが、何故か幕末に謎の消滅を致します。徳川の世が瓦解し新しい時代が来る。その為の支援ならばと淀屋一族は一切の財産を処分し朝廷に献金をし、自ら姿を消し去ったのであります。

と、この物語を終える。

江戸350年に及ぶ大坂「淀屋」の長い歴史、倉吉という地域の「千刃扱き」の話がダブルになっていて、とにかく焦点が定まらない進行が気になる。「綯い交ぜ」という手法にも一歩手が届かない。

また「講釈師見てきたように嘘をいう」という川柳のように、文化芸術の実と嘘の間の問題は難しい。特に、こうした県主導の開催のものは、文化芸術と歴史的事実は明確に親切に示した方がいい。「歴史資料はこうだが、フィクションはこう」という具合に。

ステージの「淀屋」の方は、どちらかという実を重んじるように感じがしたし、ステージの「牧田淀屋」の方は創造を重んじるように感じとれた。観客の方でなかなか整理できないままの展開に思えた。

特に「講談」という芸能は、「遊び」を大切にするのだから、「近代」の理知精神は通じない。芸能の本質と芸術としての「実とロマン」その辺りの微妙な相克も、もっと整理されてドラマとして展開されるといいと思えた。

演出・演技

舞台下手に主語り、上手に脇語りの高座台があり、中央の舞台は演技者が、奥は大西瑞香率いる邦楽団が椅子に座って気の毒な位置で演奏する。照明効果も入れて、作品のテーマに向かって臨場感を煽る舞台づくりは、いかにも近代的で理にかなった演出なのだろうが、劇場の大きな舞台での「講談」、箏曲の音色の、伝統的な面白味はかき消された。

演技者も、単一の演劇というジャンルで役を演じるのとは違って、1シーンごとの演技は、感情移入の面では難しい面があったろう。しかも、上方、江戸、倉吉の地方色の対照、廓場の描写など、技術的にも高度な技を要求されるシーンが多かった。

定性目標にそった舞台づくり、準備期間の限定などで、舞台芸術の完成度としては点が入らないのはいたしかたない“出来上がり”、といえそうだ。

舞台芸術の魅力再発見

舞台というのは晴れがましい場所。その意味では、月形のような宇宙空間を造り出した石井みつるの美術デザインは圧倒的であった。こうした舞台で脚光を浴び、衣裳デザイン、メイクへ

ア指導の桜井久美、演出監修の石川耕士といった舞台芸術のプロ中のプロが加わった力強いスタッフの中で、アマチュアとの交流のコラボレーションは、舞台芸術の品質を保つという意味では大きな収穫があったろう。

倉吉市周辺のアイデンティティーに期待する

山陰地方は、日本史の古代ロマンが息づいている。

鳥取市から倉吉市への車中では、白兔海岸を通る。「因幡（いなば）の白兔伝説」が目の前に見える。「兔は月に住む」というロマンあふれる話を重ね合わせる。日本人ならずとも月の美しさは誰もいっしょであろう。文化芸術で月を扱ったものは洋の東西数多い。「白兔では文化芸術にならない」という意見もあるようだが、「白兔と月」は文化芸術の恰好な題材。公募すれば様々な挑戦が生まれてくるに違いない。

倉吉市の駅近くのガソリンスタンドの歩道に、鼓を打つ童子、笛を吹く童子の像がある。お倉お吉という兄弟の童子で「羽衣伝説」の天女の子だという。「倉吉」の地名は 1583年の文献に記述が見られるが、それ以前は「打吹（うつぶき）」と呼ばれていた。倉吉市の象徴といふべき打吹山があり、打吹城があったから。童子たちが鼓を打ち、笛を吹く行為はそのまま倉吉の町の象徴ともいえる。「羽衣伝説」は世界へ通じる物語だが、この後日物語は初めて聞いた。アイデンティティーである。雅楽でもクラシックでも、打吹山にこだまする音楽は、倉吉周辺に広がって、住民の心を豊かに、癒やしてくれるであろう。

「千刃扱き」が全国へ展開することによって、工芸の「倉吉緋」のデザインも洗練を加えたという。倉吉市では、蔵の街並み保存、相撲の元横綱琴桜にちなんで相撲のまちづくりも盛ん、倉吉周辺のアイデンティティーの魅力は尽きないように思われる。さらに高めて、文化芸術振興に大いに役立ててほしいと願う。

（11月11日 倉吉未来中心 大ホール）

倉吉・ダブルストーリー ～淀屋と八賢士の世界～ 【第2部】八賢士の世界

平成19年11月11日（日） 倉吉未来中心 大ホール

楠瀬 寿賀子

「倉吉・ダブルストーリー ～淀屋と八賢士の世界～」を見た。鳥取県倉吉市にゆかりのある2つの物語をそれぞれ舞台作品にしたものである。地元ゆかりの物語を芝居やオペラにすることは各地にいくつかの例があるが、今回はまず“ダブル”ということが目を引いた。第1部は講談の語りを中心に芝居を加え、和楽器での音楽を組み合わせた「淀屋の世界 ～淀屋再興物語～」、第2部はポップス系のバンド編成に弦楽器のアンサンブルを加え、ドラマリーディングと組み合わせた「八賢士の世界 ～伯州里見八賢士物語～」である。

第1部、第2部別々に販売したチケットは、売り出してみたら通し券で購入した人が多かった、と聞くが、“両方見たい”と思った人々の気持ちはよくわかる。チケット料金が安価（通し券2,000円）だったこともあるだろうが、いずれも地元ゆかりの物語を、地元出身の作家や音楽家、役者たちで上演し、しかもまったく別のスタイルの舞台作品を一度に楽しめるなど、こんな贅沢なことはない。わたし自身も評価のことは少しだけ頭の後ろに置いて、楽しみに思いながら倉吉未来中心へと向かった。施設に入った瞬間から展示や飾り付けで華やいだ雰囲気を作られており、ホール内も満席に近いお客様の公演への期待感があふれていて、開演前から客席はとても居心地のよいものだったことは特筆に価する。

作品制作に関して言えば、2つの作品を同時進行で作っていかねばならないわけで、準備やりハーサルはたいへんだったことだろう。経費や人手も2倍とはいかないものの、かなりかかったのではないかと思うが、組み上げられたステージセットを両作品共通にし、背景に映像を投影したり、吊り物を加えるなどで別々のイメージを作り出すことができていた。

「八賢士の世界 ～伯州里見八賢士物語～」は、安房国の大名里見忠義が、謀反に加担した疑

いをかけられて伯耆国倉吉に流された不遇を描いた物語で、ここでは、徳川家康の豊臣攻めに反対していた大久保忠隣が謀反の疑いをかけられ、その孫娘である珠姫を嫁にとった忠義も国替を命ぜられるところから、その倉吉でも大岳院への寄進や山田八幡宮社殿の造営を代官から咎められ、過酷な運命を背負わされながら、なお前向きに己の信じる道を進む忠義に、家臣たちが永遠の忠義に誓う場面で終わる。

舞台ではそれが物語は単なる昔語りではなく、音楽でも響きの密度を感じさせる弦楽器のアンサンブルをベースに、伸びやかなメロディが物語や忠義など登場人物の心情をつづり、演出では背景の中央に宇宙的な映像を使うことで、江戸時代の物語が大きな時間の流れで今に繋がっているように感じさせるものであった。

演劇の専門的なことはわからないが、大和屋かほるの脚本はシンプルな言葉でつづられており、安房国の美しい海を前に領主としての思いを語る忠義が、大久保の蟄居・改易や里見の国替え、領主として扱われない倉吉での不遇をとおして心の中に絶えずあるのは、家臣たちを大切にしている心であり、また別れ別れになってもなお愛しい珠姫への思いがわかりやすく伝わってきた。

音楽には、地元倉吉市出身の若手ヴァイオリニスト門脇大輔を起用していたが、その音楽も20代の音楽家の若い感性を映しながら、背景の映像と相まって壮大な時や空間を広げてみせた。忠義のテーマのように扱われていたメロディの希望に満ちた雄々しさや、珠姫との別れの場面での美しい音楽も印象に残るもので、言葉と音楽との幸せな共演になっていたように思う。

自らもしなやかなヴァイオリンを聴かせた門脇は、クラシックの素養を十分に活かして柔軟な音楽性を発揮し、ヴォリューム感をもった舞台作品の音楽に加えて演出も任されていた(石川耕士監修)が、この“挑戦”は今後の門脇の可能性を大いに期待させるものであった。

クライマックスの部分でステージ奥が両側に割れて、倉吉東高校のオーケストラ部を中心にした弦楽合奏があらわれたのは、物語すべてを包括するような感動をもたらした。東高校は門脇の出身校でもあり、音楽の世界で活躍する先輩とステージをともした生徒たちにとって、本当に素晴らしい経験となったことだろう。終演後にロビーで最後の音楽が流れていたのも効果的。帰路も「八賢士の世界」が心地よい余韻を残してくれた。

ドラマリーディングを担当したのは、鳥取県文化振興財団がこれまでに時間をかけて育てたという地元の役者たちだったが、とくに忠義役に女性(國岡純子)をキャスティングし、國岡のちょっと潤んだ声質や、あえて男を演じることで気を張ってみえた表現も効果を上げて、希望や夢をもちながら不遇のうちに29才で亡くなった忠義の瑞々しい姿を描き出すことに成功していた。

また、ドラマリーディングをステージで“見せる”ということについても、いろいろな工夫が見られた。

役者は台本を手に台詞を読むのだが、ただ役者が並んで立つ、あるいは座るのではなく、場面ごとに人物がステージに登場し、人物配置のフォーメーションも変化する。例えば、頼忠と大炊助が両サイドに従えて忠義がその中央に立つ、その3人のフォーメーションと隼人がステージ上にシンメトリーに配置される、忠義と珠姫が前後に段差をつけて立つなど、登場人物の実際的な距離というより心情的な距離感を表わすような見せ方になっていたように思う。

役者は台詞からくる感情表現以外の身体の動きは一切行わない。会話する際も相手を見るのではなく正面を見据え、またあえて顔の表情も極力変えずに台詞だけで表現することを目指していたように見受けられた。場面ごとに人物はステージ上で移動したり舞台袖への出入りを行うが、歩き方はつねに一定で、直線を辿り、曲がる時も直角に曲がる。それはリーディング公演の演出方法のひとつとして興味深いものであった。

細かいことを言えば、例えば歩くときは、台詞を呼んでいなくても台本を前に掲げたままなのか、下ろすのか、掲げているなら台本を見ているのか、それとも顔を正面に向けるのか、といったことが若干徹底されていない部分があり、少々残念であった。また、このような形をとっているため、ト書き読みが「慌しくやってくる」と読んでも、実際には歩いて入ってくるところが目に見えるため、いくつかの場面で多少違和感を覚えたことも確かであるが、いずれにしろ、江戸時代の装束を現代アートのようにアレンジした、爽やかな色味や質感の衣装も含めて、このリーディングの形はとても好ましいものであった。

舞台作品としてとてもよく仕上がっており、終わったとたんにもう1回見たい、と思った。ぜひ再演を望むものである。

とはいえ、言うは易し。一度上演したものをまたやるのは簡単のように見えて、なかなか障害が多い。もちろんゼロから音楽や脚本を作り演出する、ということから比べれば、上演することそのものはかなり楽になる。しかし装置はあらためて作り直さなければならないし、キャストが変わればリハーサルも初演同様に必要であり、また助成金を活用して行った公演経費を再演時にも調達することはそう容易ではないはずだ。

わたし自身、企画当初から再演を念頭に置きながらも実現していない経験が少なからずあるだけに、再演のハードルは高いということもよくわかるが、忠義の墓のある大岳院や忠義ゆかりの山田八幡宮が地元の歴史的財産として受け継ごうとしていく、これは倉吉未来中心の定番プログラムとなるはずの作品であることは書いておきたい。

県民企画アートチャレンジ事業「KIHACHI祭りin米子」「88フォトモ」

平成19年11月3日(土・祝)~4日(日) 米子コンベンションセンターほか

総合芸術文化祭県民企画アートチャレンジ事業 西部事業 「KIHACHI祭りin米子」「88フォトモ」評価報告書

中川 幾郎

僅か1日の視察参加で、主催者の皆様の熱心なご努力とその成果を批評することの非力と僭越さを恐れます。が、アートやイベントが持つ外部性を考慮したとき、外来者や異邦人の眼も大切であろう、と思考しながらの私見です。色々で見当違いもあるかと存じますが、少しでも皆様の今後のお役に立てて下されば幸いです。

1. 「KIHACHI祭りin米子」について

この事業は、「NPO法人 喜八プロジェクト」が主力となって行った事業である。米子出身の映画監督岡本喜八は、日本映画に一時代を築いた人であるが、このNPOは、その岡本喜八のスピリットを継承し、新たな創造活動を支援することを目的としている。

また、「KIHACHI祭りin米子」は、次世代を担う若者達の多彩な創造活動を支援することを目的とする、としている。

(1) 事業全体の印象から

基調フォーラム、幾つかの映画上映会とティーチ・イン、DVD上映会、喜八アーカイブ展示、ジャズライブ、バンドコンテストと、多彩な事業展開を行った。実行委員会体制には、米子工業高等専門学校、米子南高等学校の若者達も参画しており、当日の各会場における運営・実行体制にも若者達の雰囲気を感じた。PR用の印刷物、チラシ等の宣伝材料のレベルは高い。デザインも良く、岡本喜八のエネルギーを彷彿とさせる。事業としては、大変丁寧に組み立てられた企画で、質の良い内容と見受けた。

しかしながら、全体的な参加者が少なく、8つの事業・会場での延べ参加者が1211人とどまったことは、どこかに事業のコンセプト、戦略、戦術に考慮すべき点があることを物語っているのではないだろうか。因みに内訳を見ると、最も多かったのがKIHACHI DESIGN ART EXHIBITIONに421人であり、以下が喜八アーカイブ300人、森下滋ジャズライブの205人となる。そのほかは、いずれも100人以下(15人~90人、平均50人弱)の参加者となっている。

事業全体の経費は、決算見込額で438万円となっており、会場数、総事業数の多さから見ると決して多すぎるとは思わない。また、県の委託金180万円の1.5倍の自主財源を獲得しており、その面での主催者側の努力の大きさを大いに評価したい。

(2) 幾ばくかの考察

若者とイベント

事業目的の一つである、若者達の多彩な創造活動を支援する、という趣旨は生かされている。人材育成という点からも、若者が代表、役員を務めていることに好感を持った。

また、事業企画・実施そのものもアートなのだという視点に立てば、アートとしての事業内容の良さは評価されるべきである。

参加者数の少なさ、商店街との連携は？

問題は、事業への参加者数が少なすぎる点である。また、会場の基盤である商店街との連携はどうなっているのか、その気配が感じられなかった。日本全国で多くの商店街がシャッター通りと化し、土曜日・日曜日も閑散としているのは良く見受ける風景だが、せっかくの事業にも、商店街は呼応しなかったのだろうか。少なくとも、会場と会場をつなぐ商店街への強い働きかけや、88フォトモとも連携して、会場を渡り歩く参加者が休んだり、立ち止まり訪れるような店舗（喫茶店、食堂、土産物屋、美術・小物関係）の協力依頼などの掘り起こしをしても良かったのではないだろうか。

屋外展開と脇を固めるイベントを

この事業は、岡本喜八を主題としており、その作品を紹介することに主力がおかれている。全般的に温かな展開であり、屋内実施が主力である。しかしながら、会場間の距離が点として相対的に離れていることもあり、パワー不足を感じさせた。喜八のアートが持っている、既成秩序に果敢に挑戦するパワーを感じさせるもう一工夫が欲しい。

場所的なバラツキ、パワーと連坦性の希薄さを補うためにも、商店街の角とか、アーケードの中で音のある屋外イベント（ストリート・ライブなど）を企画しても良かったのではないかと、思う。これは、神社・仏閣に音と露天商が付きもの、という発想でもある。

イベントの本義から

この事業全体は、正確にはやはり「催し」である。催しは、主催者と参加者との間にキチンと仕切りがある。いわば、プロとアマとの違いを明確にし、そこに展開される内容に参加者の憧れ、尊敬、発見、等をもたらす。イベントは、正確には設計された「事件（Event）」なのであり、主催者と参加者との融合、出会い、ときには逆転を期待する。

岡本喜八の精神には、このイベント性がある。つまり、既成秩序や文化を映画としての虚構の上であれ破壊し、笑いも含めてそこに新しい時代の切り口を開いていく。岡本喜八を、まるで無形文化財のように安置することはある種の誤りであり、それは滑稽ですらある。彼の精神には、既成秩序に立ち向かう「若者」が存在しているといえよう。喜八的なもの、それをイベント化するのだから、その若さと荒々しさをいかに表現し、参加者と共有するかという視点と事業が欲しかったのは、評者の我が儘か。

フローとストック

催しであれ、イベントであれ、その究極の目的は「ストック」を形成することである。この事業が意図するストックは、恐らく新たな人材確保と喜八の記憶保全に尽きるだろう。しかしながら、どのようなストックも、フロー化の流れの中で再生するのであり、既存ストックを回顧し展示するだけではいずれ限界がくる。そのままでは新たな人材もストック化できない。次なる喜八イベントは、パワー発散と大きなフロー化が課題と感じた。

2. 「88フォトモ」について

この事業は、写真（フォトグラフ）を材料にして模型（モデル）を作る「フォトモ」を媒介とした事業である。米子市内を素材として、このフォトモを作成することを通じ、米子再発見、まちづくりへの視点を磨くこと、米子大好き人間、いわば、本物の市民を発掘し、作り出していくことが主題である。88とは、米子の「米」の文字を「八十八」に分解したところから名付けられた。

(1) 事業全体の印象から

3D写真家であり、フォトモの考案者でもある糸崎公朗氏を中心とした催しである。下手をすると、たんなるオタク趣味的な事業となりかねない内容だが、それを防ぐために、9月から開始されたワークショップ等を通じて、着実に糸崎氏の思考を学習、共有するところから始められた。

事業全体は、展示、講習などの穏やかな内容ではあるが、写真撮影だけではなく、それを町や建物の模型として作成していく過程を重視している。つまり、この事業のコンセプトは、時間、人間、空間という、定住市民にとっての無形財産である「3つの間」のうち、空間への感度を向上させるものであり、市民としての町への愛着、ハードとしてのまちづくりへの批評意識を高める効果があると見受けられた。宣伝材料のチラシ等もやはりレベルが高い。

参加者は、本体事業の88フォトモ展、街の撮影ワークショップ、講演会で延べ1153人である（別に、プレ事業は延べ99人）。この種の穏やかな事業としてはまずまずの参加者数ではないだろうか。事業全体の経費は163万円強となっており、妥当な範囲と思う。ただ、県の委託金が131万円強であり、自主財源は33万円弱で20%弱となっている。これは、公費の支援がなければ、自主的に継続開催することが難しい、ということである。糸崎氏の思考を引き継ぎ、市民主体で自立して実施継続する、次なる展望を開いていってほしいと思う。

(2) 気づいた点、考察

行動的参加者の確保

街の撮影ワークショップの参加者数が21人と少ないように思う。この事業の趣旨が、たんなる展示ではなく参加と作業にあること、そこから得られる発見や心と行動の変化にあることを考えると、この参加人数でも良いのだろうかと感じた。さらに、撮影者はそれぞれ単独で行動していたようだが、ある程度のグループ分けや、可能ならば、経験者やアドバイザー的な人がついていての方が効果的ではないか、と思考した。

人材のストックとネットワーク化

またこの事業を通じて、指導者たり得る人材はどのようにして開発され、得られるのだろうか。ワークショップに参加した人をネットワークで結び、拡大していく方策は、と考えさせられた。9月に事前のワークショップも行っているのだから、それらの受講者も含めるとかなりの数となる。これらの人たちをどのように資産化するか、この次のステップと展望を知りたい。

アートとしてのコンテスト

今回は、入門編であったからだろうか、88フォトモ展では9月のワークショップで作られた作品を展示するにとどまっていたように思うが、その中でも優れた作品を顕彰するなど、コンテストを実施しても励みになったのではないだろうか。

3. 全体を通じて（都市、地域アイデンティティ確立の視点）

いずれの事業にも感じられたことであるが、県外の人や、遠くの人にも発信し、それらの外来者、訪問者を意識した、外部の人に見て貰う事業、積極的に地域アイデンティティを確立し、外部評価を求める事業としてのコンセプトや仕掛けがなかったように思う。企画内容的には一定の水準に達していると思ったが、事業運営のあり方、事業展開が全体的に内向きで大人しすぎる。

つまり、平地に乱を起し、既成秩序に揺らぎをもたらす「イベント」というよりは、まだ啓発的な「催しもの」の段階であり、印象的には地域内部啓発の事業のように見受けられた。事業の「戦略」目的である、定性目標1の（アマチュアと専門家のコラボレーションや、芸術ジャンル間のコラボレーションによる良質な作品の創造）は強く意識されている。また、定性目標2の（若者が参画できる環境の整備）、定性目標3の（若者が主導となり企画、参画する事業の展開）は強く意識されているが、定性目標2の（地区企画運営委員会での作品創造とアートマネジメントの促進）（総合的な広報の推進体制の強化）（劇場全体が人が集う街の広場となるための演出）は達成できていないのではないかと感じた。定性目標3の（世代間を越えた交流を目的とした鑑賞型、参加体験型事業の実施）も目立ったものは見受けられない。一言で言えば、もっと強い自立志向、自己主張があって然るべきではないだろうか。さもなくば、外部訪問者の導入には結びつかず、結局は地域経済の活性化にも結びつかない、と感じた。

以上のような点が、外来者としての愚見です。主催者の方々におかれましては、見当はずれと思われるところ、あるいはお気に召さない点があるようにも思いますが、少しでも今後の参考としていただければ、と存じます。

07年鳥取県総合芸術文化祭 鳥取オペラ・ルネサンス「先人たちの音楽物語」 評価レポート

高橋 浩子

事業全体について

「先人たちの音楽物語」の評価を述べる前に、鳥取県総合芸術文化祭という県の独創的な事業について、一言感想を記しておきたい。

平成 15 始まったこの芸術文化祭は、「創成期」「成長期」「成熟期」というそれぞれ 3 年を 1 期として、9 年間というスパンで計画された事業で、現在は「成長期」のただ中にある。9 年もやれば、1 年 1 年の積み重ねによる成果がはっきりした形で見えてくる。初めから中長期的に目標を見据え、しかも 3 年ごとに見直していく計画は、芸術文化祭を単なる一過性のお祭りに終わらせないという意欲が強く感じられる。周到にしかも柔軟に立てられた事業が平成 23 年にどのような成果を鳥取県民にもたらすのか、楽しみである。

また、芸術文化祭の舞台となる都市を一ヶ所に絞らず、県内の複数の町でしかも開催日をずらして催行することによって、この芸術文化祭が、点が線となり、線が面となって県全体に情報が行き渡っていくよう計画されていることにも、好感が持てる。今後もひとりでも多くの県民の参加があるよう期待したい。

鳥取オペラ・ルネサンス「先人たちの音楽物語」

1. 企画

総合芸術文化祭のプログラムには「県民企画アートチャレンジ事業」という部門がある。県民であったら、誰でも応募することができるプログラムである。鳥取オペラ・ルネサンス「先人たちの音楽物語」は、公募に応じて提出された 7 つの企画のうち採択に至った 3 企画のひとつである。しかも、当初は「企画内容の再検討を採択の条件とする」という条件つきであった。最初の企画名は、鳥取オペラ・ルネサンス「幻のオペラ～鳥取県民オペラの軌跡と展望」であった。このタイトルからも推測出来るように、2007 年 4 月の段階ではまことに茫漠としていた企画内容から、焦点を徐々に絞り上げて、8 月に「先人たちの音楽物語」にまで煮詰めて、実現可能な舞台作品に仕立て上げた努力をまず多としたい。その事業計画には、

- 1, 鳥取県ゆかりの先人の優れた作品を発掘し顕彰すること。
- 2, 地域独自による質の高いオペラ作品を創出、発進していくこと。
- 3, 若い世代の担い手を育成すること。
- 4, 気軽に楽しめるオペラ作品の上演を通じ、舞台芸術に親しむこと。

以上 4 点項目が目的として掲げられていた。

そのうち、報告者が一番注目したのが、第 3 項目「若い世代の担い手を育成すること」である。この項目にはさらに次のような文言が続いている。「地域で精力的に芸術活動を行っている団体や個人と共に、この事業の運営を担う学生や若い世代が企画・運営をしていくための人材の育成と企画・運営をしていくためのノウハウや考え方を見つける」。この目標は、言うは易しく、実行は極めて難しい。例えば、大学の教育課程でこのような人材を作り出そうとする計画は、今やかなり多くの大学で試みられている。しかし、何らかの具体的な成果が上がる確率は、残念ながら低い。講義や演習の範囲に留まっている限り絶対に身につかない技術と実地体験がなかなか実行されていないからである。

翻って今回の「鳥取オペラ・ルネサンス」の企画内容を見ると、提案者である「鳥取オペラ・ルネサンス実行委員会」委員長は鳥取大学の大学院生だという。彼女が率いる若い学生集団が今回この課題にチャレンジした。実際に人を動かし、県の事業部と交渉を繰り返し、著作権料を支払う等々、舞台制作に必要な事案をすべてこの学生集団が行った。学生にとっては何物にも勝るアートマネジメント実践の絶好の機会であった。

予算表を見ると、鳥取県からアートチャレンジ委託費 180 万円、鳥取大学地域貢献支援事業

から助成金30万円、入場料60万円、広告料10万円とある。県に支えられ、大学からも助成金をもらって、合計280万の資金で彼らはそれぞれアートにチャレンジし、アートマネジメントの何たるかを現場体験した。彼らが今回の体験で何をどのように獲得したのか、今後の成長を待ちたい。「県民企画アートチャレンジ事業」の一環として、大学院生達に予算を与え、発表の場を用意した県の判断もなかなかのものと報告者は考える。

2. 実行

学生達によるアートマネジメント実践の裏には、当然ながら多くの人々の助力が必要だったであろうが、プロフェッショナルな人材とアマチュアが協働して舞台を作り上げてゆくという、本芸術文化祭の基本理念がここでも有利に働いたと言える。

ドラマリーディングには林憲二、松本健一という鳥取演劇集団に属する、或いは属していた演劇人があたり、オペラのキャストとしては様々な音楽大学出身者または在学中の学生が鳥取県出身という絆で結ばれて出演した。

企画実現に向けての重要な部分は殆ど実行委員長である大学院生・中村奈保氏が担っていたと言う。リーダーとしての彼女が担った仕事は、おおよそ以下のようなものであったと聞いている。

- 1, 作品調査：鳥取県ゆかりの先人とその作品・資料に関する調査。
- 2, 台本執筆：実行委員長自らが筆をとって、第1部は、明治時代に活躍した杉谷代水と、昭和の作曲家高木東六という、実際には会うことのなかった二人を舞台上で会わせた。それによってお互いの功績を知るようになる会話は、聴衆にも二人の業績を改めて知らしめ、同時に第2部の高木東六のオペラへの導入ともなっていて効果的であった。
- 3, 高木東六のオペラ作品「春香」の抜粋作業。全曲は3時間ほどにもなる長丁場のオペラである。そんな長いものをそのまま上演するのは現実的ではないと判断した彼女は、作曲を専攻している利点を生かし、ここぞという箇所を見抜いて抜粋した。
- 4, 抜粋した部分の、編曲と指揮を作曲家・新倉健氏へ依頼（結果としてオーケストラは16名の奏者による室内オーケストラとなった）。
- 5, 第2部「春香」の演出をプロの演出家・中村敬一氏に依頼。

何しろ予算が予算だから、指揮も演出も格段に安いギャランティで仕事を引き受けている。新倉氏は鳥取大学の教授である上に実行委員長の指導教官でもあるから報酬があるかないかの額で当然とも言えるが、全くの部外者である演出家もいわばボランティア精神で参加していると思われる。それ以外の出演者（歌手、ダンサー、役者、ナレーター、オーケストラ奏者）スタッフ（練習ピアノ、舞台監督、振り付け、美術、映像制作等）も押し並べて破格の安値報酬である。彼らは単なる頼まれ出演者ではなく、「みんなで作ろう、鳥取のオペラ」というような気概を持って参加していたのだろう。そのような熱気に制作現場は包まれていたのではない。このような熱気がある限り、芸術文化祭は安泰である。決して熱気を冷まさせないよう、これは行政にお願いしたい。

「鳥取オペラ・ルネサンス「先人たちの音楽物語」」の評価

1. 企画面：鳥取県のみならず他府県の方の人が殆ど知らなかった作品を、一部分にせよ上演し、彼らの功績を改めて顕彰したことは極めて啓蒙的であった。片や明治時代における日本オペラ創成期の作品、もうひとつは戦前から戦後に活躍して主にシャンソン風な歌を多く書いてきた作曲家のオペラ作品である。特に高木東六の「春香」は幻のオペラと言われてきた。このような機会がなければ、忘れられたままに過ぎてしまったことであろう。

「春香」は朝鮮半島の伝統的な文学作品「春香伝」に題材をとったオペラである。風光明媚な広寒楼のほとりで展開した男女の愛の物語が優しい音楽とともに展開してゆく。

もっとも、現在のオペラ作曲の水準から見れば、音楽にドラマを支える力強さが欠けているが、それは致し方ない。それだけに、全曲ではなく抜粋にしたのは正解であった。さらに、原曲を室内オーケストラに縮小したことも上演される場所と予算を考慮に入れると適切な処置であった。

2. 演奏面：企画は大張り切りであったが、実際の演奏となると全く問題なし、というわけにはいかなかった。例えば、高木東六の代表作「水色のワルツ」を歌った歌手は低音が全く響かな

い。「水色のワルツ」はソプラノではなく、少なくともメゾ・ソプラノかアルトの音域の歌である。そのあたりの配慮がもう少し欲しかった。

また、少人数の合唱ではひとりひとりの力量が問われる。もっと練習を重ねておくべきだったと言わざるを得ない。

舞台は一応コンサート形式のオペラということで、そのために大道具は皆無、小道具も最小限度で、衣裳だけが着けられた公演であった。大道具を使わない代わりに、舞台奥のスクリーンに千代川の古い風景写真や、舞台の背景を写し出していた。特に千代川の写真はパソコンからパワーポイントでスクリーンに写すという、今までのオペラ公演では考えられない手法を用いていたが、この一枚の古写真が前舞台で話す代水と東六の時代へと一気に我々を誘い、効果的であった。また、字幕装置もないので、これまたパワーポイントで直接舞台の脇に映し出された。スクリーンに映写したのと異なり判読し難かったが、それもこれも限られた予算の中で少しでも観客に満足してもらえたらと、演出家も一緒になっての智恵の絞り合いだったのだろう。豪華絢爛の華麗な舞台とは異なる親しみ易さ、アットホームな舞台の妙味が醸し出されていた。

観客は公演が始まった頃は、それほどでもなく空席が目立っていたが、時間が経つにつれて次第に数が増し、最後には会場がほぼ満員となって、この催しは終わった。今後は「鳥取オペラ・ルネサンス実行委員会」が目論んだ第4項目(気軽にたのしめるオペラ作品の上演を通じ、舞台芸術に親しむこと)の実現に向かって努力を続けて欲しい。

鳥取県青少年郷土芸能の祭典2007

平成19年11月4日(日) 米子コンベンションセンター 多目的ホール

第5回鳥取県青少年郷土芸能の祭典を見て

土居 俊介

すっかり定着した「青少年郷土芸能の祭典」も5回目を迎え、米子の大きなホールをさまざまな芸能のエネルギーが包みこんだ。常連の実力派も初めて登場する地域のグループも、積み重ねてきた稽古の成果を十分に発揮したと言えよう。幕開け前の映像を見ても指導者や先輩たちが熱心にリードし、現役のこども達も懸命にそれに応えている様子がよく見えた。この参加者たちを迎える主催者や制作スタッフも年々力をつけ、今回は段取りに余裕すら感じられる舞台と見た。

楽しめた「淀江さんこ節」

今回は他県や海外からのゲスト出演はなく、県内だけのグループ展示となったが地味ではなく、いわばアトラクション的立場の「尼子再興・勝田浜合戦」という大作も交え、バラエティーに富んだステージだった。

旅人として、観客としての私を最も楽しませてくれたのは、淀江の「さんこ節」である。昔、南九州で盛んに唄われた宴席の民謡「はんや節」が、当時の海運のメインルートであった日本海沿岸をめぐる北前船が、各地に置き土産として残した唄である。「はんや節」は土地の唄と混じり、鳥取では「さんこ節」として残り、さらに北では「おけさ」や「江差追分」などに形を変えて今も愛される民謡本流の唄のひとつだ。それが宴席のアドリブ芸の壁塗りの仕草や鳥取オリジナルの誇るべき傘踊り、さらには山陰の囃子打楽器の銭太鼓とドッキングした「淀江さんこ節」は、娯楽系郷土芸能の傑作と思う。そして驚いたのはこのけれん調の唄を少女が見事に唄いこなしたことと踊りの鮮やかさだ。この米子の貴重な財産をしっかり継承してもらいたいと心から思った。

米子からは「米子盆踊り」も参加していた。古い伝統的な正しい盆踊りの香りを徐々に味わった気分である。昔の村の盆踊りでは、土地に伝わるいくつかの唄で踊っていた。こども達が踊る夕方の踊り、女だけの踊り、盛り上がったテンポの速い踊りやラストの静かな踊りなどを組み合わせ夜更けまで踊ったものだった。今見られる有名な盆踊りでは岐阜の「郡上踊り」などでその型を楽しむことができる。「米子盆踊り」ではこうした古い型が見られて楽しめた。特に今で

はめったに見られない〈なんばん踊り〉(右手を出した時に右足も出す昔の歩き方)も面白かったし、太鼓と囃しだけのシンプルな伴奏も気分よく見ることができた。

「因幡麒麟獅子舞」「荒神神楽・八重垣能」は毎年恒例の奉納芸で、高校生が先輩から受け継いだ芸をきっちりと演じきってくれた。因幡地方の麒麟獅子は各地に残っているだろうが、高校で稽古しているのは智頭農林だけなのだろうか。「法勝寺歌舞伎・白波五人男」は地方芝居という文化財だが、やはり現地の古い芝居小屋か神社などで見ればさらに趣があったらと思うられた。

劇場型創作芸能をどう見るか

私は昨年の倉吉大会の感想にも記したが、創作郷土芸能とはなんだろう、という違和感は今回も強く感じられた。制作者サイドの意図や意気込み、演者の技と力、作品としての完成度の高さは十分に評価する。だが本来の郷土芸能とはなにか。それは土地の風俗習慣文化、伝統、宗教、祭りや行事などから時代が作り上げ、伝えられてきた芸能だと私は思っている。当然時代とともに加工され続けてきたことも含めてである。しかるに昨年と今年の〈創作郷土芸能〉は、地域の香りが薄いイベント型組太鼓をベースに、これも地域色がない能楽器と日舞を取り込んだ構成となっている。これらの作品から感じられる〈郷土〉とは何か。しいて言えばネタとしての歴史(尼子)と伝説(八犬伝)だけである。

全国でいま隆盛の組太鼓の元祖といわれている、諏訪の小口大八と私が出会ったのは昭和37年ごろ、私も担当していた民謡郷土芸能番組でだった。小口さんは廃れかけていた御諏訪太鼓を復元し、ヴァージョンアップした人だ。私の記憶では据え置き型の組太鼓は当時日本ではこれしかなかった。それが東京オリンピックや大阪万博の後はご存じの通りである。小口さんと最後に会ったのは平成10年、諏訪の御柱祭りの時だった。雑談のなかで「これまで海外も含めて各地の組太鼓を5~600は作っている」と言っていた。今観光ホテルのアトラクションや学校のクラブ活動含めると2000を超える太鼓グループがあるに違いない。これら新興グループは、

連盟とか××協会の指導員や各グループの達人が指導して立ち上がったものだ。従って私の言う郷土とは少し離れたポジションの芸能活動なのである。

例えば佐渡に鬼太鼓(おんでこ)という、鬼面をつけ吊下げた太鼓を打つ伝統ある郷土芸能がある。この名を冠した太鼓や和楽器を使った音楽集団「鬼太鼓座」の演奏は郷土芸能とは言えず民俗音楽集団として公演活動をした。ましてこの鬼太鼓座から立ち上がった「鼓動」はまったく違った存在感を持ち、彼らも〈郷土芸能〉とは言っていない。

私が何を言わんとしているのか、それは重ねて書くが風土から発生したいわゆる郷土芸能と、無国籍の新興太鼓芸とを同じ舞台上で並列に配置することの、構成上の違和感についてである。

今回の米子がいな太鼓はそれ自体30年の歴史を持つ堂々たるグループであるし、実力もある。昨年の倉吉のグループも然り。しかし青少年郷土芸能の祭典に〈青少年だっているぞ太鼓集団〉のパフォーマンスがメインをつとめることはやはり馴染めないのだ。

町おこしや住民の活動意欲、学校の芸能保存活動の奨励という目的のためには、少々違和感には目をつぶろうという判断もあろう。それならば公演を3部構成にし、第2部に「若い鳥取の響き」とかタイトルをつけ、創作作品発表の場として位置づければ今後の存続、発展のコアになり、構成的にも整合性があると私は思う。

蛇足ながら

舞台演出のレベルは年々向上しており、落ち着いた気分で見ることができた。今年の米子のステージは広く、客席も横幅が広い。地味な演目は不利かなと思ったがその心配は無用だった。大がかりな演目は舞台を縦横に使い、こじんまりした静かな演目はセットよりも、控え目で深みのある照明で効果を上げていた。今年も裏方の努力に拍手したい。

蛇足　　ことしは倉吉農高の太鼓は出演しませんでした。私個人の願望として倉農の大先輩で今年亡くなった横綱琴桜をテーマにした新曲を作ったら、と会ったら言おうとしてました。相撲の触れ太鼓や寄せ太鼓、呼び出しなどを取り入れた倉農しか作れない、演じられない曲を、いつか聞きたいと思ったわけでした。

はじめに

一昨年、昨年に引き続き、本年も皆さまの努力の成果を拝見させて頂く機会に恵まれ、大変ありがとうございます。例によって部外者の勘違いもあるかもしれませんが、客観的に見させて頂いた感想を正直に申し上げるものですので、例えいささかなりとも今後のお役に立てることがありましたら幸いです。

会場について

会場のビッグシップは米子駅からも至近距離であり、近未来的な外観を持つ巨大な施設に目を奪われました。ただ、駅から見ると米子市文化ホールの蔭にあたるため、初めて訪れた者には一瞬入り口がわかりにくい難点があります。また、正式名称の米子コンベンションセンターという表示と、愛称ビッグシップとの関係が把握しにくい面もあり、催しもののチラシや情報などでも両者が混在しているようです。特に部外者にとっては必ず併記されているなどの配慮が必要と感じました。

総評

昨年同様、客入れ時にビデオを使用して、出演団体の紹介が行われました。ビデオそのものは簡潔な構成でしたが、事前情報として評価できます。ただ、開演約20分前から上映されるため、開演時間を目指して入場される方にとっては、いわば定刻より早く開演してしまったのと同じことになりかねません。本来であればやはり所定の開演時刻から上映が始まるか、でなければ事前のチラシに紹介ビデオがある旨の予告があるべきでしょう。せっかくの内容であるだけに残念な気もしました。また、このことは全体の上演時間との兼ね合いもあることと思われまふ。客席にこどもたちも多く集まっている今回のような催しで、三時間を超える内容はやや長すぎるのかもしれませんが。個々の演目を短くするのが難しければ、参加する団体数を削減することもやむを得ないことと思ひます。

もうひとつ感じたのは、上演中の客席の照明についてです。郷土芸能は本来野外で上演されるものも多く、ホールなどでの上演の際、客席の明かりをどうすべきかも、ひとつの検討課題です。暗くすることによって観客が集中できる利点はあるますが、プログラムの記事を読んだりするには、ある程度の明るさが必要です。今回はほぼ常に真っ暗であったため、正直なところ、私自身も各演目のメモを取るのに手探りで辛うじて行うのが精一杯でした。また、次の演目との間で客席を移動するにもいささか不便な状態でした。一般に、クラシックのコンサートや演劇などでは、観客の興味を舞台に集中させるために客席を暗くしますが、舞台と観客の一体感が必要な場合には、客席が明るいことにも意味があります。東京の歌舞伎座では幽霊の出る場などを除いては客席が明るいままが普通のようなようです。

演目寸評

「白波五人男」はいかにも地歌舞伎らしい味わいで、こどもたちの初々しさも好感が持てました。ただ、伴奏の三味線の音の録音がかなり古いものであるようで、地元の舞台ではそれもまた雰囲気づくりに一役買うのかもしれませんが、近代的なステージではやや似つかわしくない感じでした。

「三徳山こども行者太鼓」は行者の装束、太鼓の内容ともども清楚な印象でした。リズムそのものは単純で、決して凝ったものではありませんが、敢えてそうした舞台映えするものを狙わずに、高潔なものにしようとする精神性を感じました。

「淀江さんこ節」は高校生、こどもたち、保存会の競演に加え、沖縄の獅子もゲスト参加して華やかなステージでした。いかにも民謡らしい楽しい雰囲気は何と言っても捨てがたいものです。

「因幡麒麟獅子」はおなじみの参加ですが、いつ見ても赤い装束と格調高い音楽性に見とれてしまいます。海外公演もこなすとのこと。郷土の誇りである芸能を海外でも披露できることの素晴らしさは、参加すること对于我们にとっても何よりの宝物でしょう。

「創作郷土芸能・尼子再興」はビデオによる朗読に続き、米子がいな太鼓による太鼓演奏と舞をはさんだ構成。地元の歴史を再認識する意味でも、その構成の努力は貴重なものと思われます。ただ、感想としては朗読の筋が複雑で一度聞いただけではわかりにくいことと、太鼓のシーン、舞のシーンなどがそれぞれ独立した印象で、全体としての統一感にもうひとつ工夫が欲しかったと思われます。太鼓の迫力は素晴らしいものでした。

「米子盆踊り」は無伴奏の唄による二曲が披露されました。うち一曲は今年復活上演にこぎつけたもののことで、一度廃れたものが復活されていくのは頼もしい限りと言えましょう。いかにも町の盆踊りらしい素朴なものならばこそ、この暖かな雰囲気をも是非保って欲しいものと思います。

「ふるさと日南の風」は地域で立ち上げた太鼓グループとのことですが、少人数ながらその腕は確かで、リズムの複雑さに驚かされました。今後の成長にますます期待したいと思います。

「荒神神楽・八重垣能」は恒例の出演ですが、相変わらずダイナミックな大蛇に感動しました。衣装や装置の豪華さもさることながら、訓練された動きが何と云っても見事でした。高校生ならではの若さに溢れるステージは天下一品です。

今後の課題について

例年に比べ、やや客席に空きが目立ちましたが、もともと大きな収容力のホールであるため、基本的にはやむを得ないことと思われます。ただ、プログラムが進むに連れ、徐々に空席が増えていったのはいささか残念でした。出演者のご家族などは、お目当ての演目が終われば退席されるのは無理もないこととはいえ、客席が関係者ばかりというのでは今後の発展性にも疑問が生まれます。言うまでもないことですが、郷土の誇りとでもいうべき演目の数々は、ただ伝統があるからというだけではなく、県民の精神的なバックアップも含めて、皆で育てていくべきものでしょう。例えば県内各地の学校や施設などからも、もっと動員がなされるべきなのではないでしょうか。こうした行事の開催意図としても、単なるお国自慢で終わるのではなく、公演と平行して積極的に郷土芸能と青少年の関わり、その必要性などについて語り合う場が必要かもしれません。幸い、鳥取県各地の郷土芸能は形こそ様々ですが、数量的にも質的にもきわめて充実したものと言えます。何より青少年の参加により次世代に引き継いで行こうという気運があることが重要です。こうした行事が続くことにより、お互いに情報や意見を交換し続けて行くことができるのが望ましいと思われます。公演そのものが目標なのではなく、さまざまな施策の結果として、それらの取り組みが有機的に結実したものにこそなるべきなのではないでしょうか。

鳥取県出身のアーティストによるコンサート こどもの楽園

平成 19 年 11 月 25 日（日） 県民文化会館 梨花ホール

鳥取県出身アーティストによるコンサート「こどもの楽園」公演について

栗飯原 眞

< 恵まれた制作環境がこの良質と豊かさを作った >

宮川彬良編曲・指揮のシリーズが響敏也脚本、新真二プロデューサーらスタッフの入念な取り組みのもと、見事なエンターテインメントとして快調な仕上げだ。このシリーズを観るのは平成 18 年度の「モーツァルトが生き返る日」に続いて 2 度目だが、その成功を受けて、今回はベートーヴェンが梨花ホールにやって来て 21 世紀の作曲家アキラと自作について語り進む仕掛け。

前半にブリテン「青少年のための管弦楽入門」やエルガー「威風堂々」による、こどもたちと大人のための音楽劇場と題したプロローグ風展開において、第2部が眼目のベートーヴェン登場となる。いささか重い主題をどうさばいてゆくか、スタッフの腕前やいかに、の興味で見守る。

声優の石原慎一が視覚的にもベートーヴェン像を体現しているのが起用の妙でニヤリとさせる。演奏の楽曲も「運命」をさまざまに切り取って巨匠の足取りを追い、「エリーゼのために」「エグモント」序曲、「トルコ行進曲」「月光」、シンフォニック・マンボ 5「運命」など。さらに交響曲も第2番に、最後の第9番と欲張った。

その中の幾つかは大阪フィル・ポップスのためにすでに編曲済みのレパートリーでもあり、ブラドのマンボ 5と運命を結んだ自信作などを織り込んでアキラのベートーヴェン・アプローチは万全。そして圧巻はやはり最後の「第九」、見事な高揚で閉じた2時間を超えるコンサートからは制作側の熱気も伝わって、一度限りではもったいないの思いがわいた。

驚きはベーちゃん・フィルときゅーびっく・コーラスが届けたアンサンブルの練り上げ。管弦楽に半数の地元出身の奏者を加え、アンサンブル・ベガなどアキラの活動を支える達者たちとの協働も見事、「第九」の原語による熱い合唱など、よくぞここまでと感服の水準を聴かせた。

客席を見ると前年と同じく、想定する子供と家族の三世代という好ましい構成。アキラへの子供たちの親近感も多分、テレビの「クインテット」が育んだもの。昨年に比べると、幼、小の子供たちには時間の長さも「ベートーヴェン」はちょっときつかったか、2部では多くが親のひざ枕ですやすやが目についた。代わってというか中、高生が居ずまい正して集中するさまは、ひとえにベートーヴェンという主題のせい。制作側も承知とみたが、なべての関心を引きつけるのは無いものねだりというもの。

企画書の注記に目がとまった。今回は実行委員会の形をとらず、プロデューサー兼音楽監督にゆだねたという。正解というべきだろう。往々、倣いの委員会立ち上げでは船頭多くして、の幣を引きずることが多い。鳥取の試みは、外部から迎えた柴田英紀・統括のもと重ねてきた制作環境が手にした説得性と言挙げしたい。

年々のコンサートが発信する力は、企画の鮮度と内容の豊かさでも突出した水準を示して、このプロジェクトの明が光る。地域に限る一過性のイベントにとどまるのはいかにも惜しい。鳥取から発する文化催事として、公文協を軸にした広がり、再演などの策はないものか。

「ベートーヴェン」を大テーマに熱気に満ちた舞台を展開 今後に向けて検討を要する課題も残す 2007年の『鳥取県出身アーティストによるコンサート』

嶋田 邦雄

県民文化会館の1階広間はこの日、昼を過ぎた頃にはもう子供連れの人たちで熱気に包まれていた。午後2時から“梨花ホール”で開かれる『鳥取県出身のアーティストによるコンサート』がこの日のメイン・イベントだが、それに関連して企画された催しを皆、楽しんでいる。県民会館に入る前に歩いてきた鳥取市のメイン・ストリートは日曜日ということもあって、シャッターを下ろした店が多く閑散としていたのとは正反対の活況だった。年一度のこの企画が県民に根を下ろし始めたのだろう。ロビーに並べられた民芸特産なども巧みに雰囲気演出している。梨花ホールに入った。私の席の両側とも母親と2人の子供、といった家族連れで、開演前のおしゃべりからも今日のコンサート“こどもの楽園”への期待が伝わってくる。昨年同様、宮川彬良を中心に、辻井淳、釋伸司らのプロの演奏者と、鳥取県出身、あるいは鳥取市交響楽団のメンバーなど鳥取県の中で活躍するアーティストで編成した混成オーケストラが“音楽の楽しみ”を会場の子供たちに伝える役を担った。今年はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の没後180年に当たることから、企画の大きなタイトルも「ベートーヴェン」。主演の混成オーケストラもそれに因んでだろう、「ベーちゃん・フィルハーモニー」と名づけられていた。

“こどもの楽園”は2部構成で、第1部は「必ず良いこどもになるための音楽入門」。子役(樋口智恵子)とアキラ(宮川彬良)が案内役になって寸劇を演じた後、ベンジャミン・ブリテンの「青

少年のための管弦楽入門」の冒頭に置かれたヘンリー・パーセルの主題を演奏したが、その展開の仕方が面白い。まず、辻井淳が登場、ヴァイオリンのソロでテーマを弾く。続いて釋伸司の第2ヴァイオリンが加わる。さらにヴィオラ、チェロ、コントラ・バス、クラリネット、ファゴット、ホルンと演奏者の数が増えていった。増える度ごとに同じテーマを奏するので楽器の数、種類によって合奏の内容がどう変わっていくかが手に取るように分かる。弦楽器だけの合奏だとバロック期の合奏協奏曲のような風貌だったが、それに管楽器が加わるとぐっと色彩感が増し、古典派やロマン派以降の管絃楽曲にも通じる華やぎが演出される。聴衆もこの“音の変容”に沸き立っていた。私の一列まえの親子は体で喜びを表していた。5つの弦楽器で舞曲風にテーマが奏される間、座席の前のごく狭い空間に立った子供と、座席の母親が手をつないでリズムに合わせ、静かに立ったり、座ったりを繰り返していた。まさに音楽の共同体空間が作り出されていた。“こどもたちと大人のための音楽劇場”のサブ・タイトルは文字通り満たされた形である。

第2部に移ろう。「明日に約束しよう！」と銘打ち、“ベートーヴェンとアキラ『みんなの命を考える音楽会』”のサブ・タイトルをつけた音楽劇場だ。ここでは180年の眠りから覚めたベートーヴェン（石原慎一）が21世紀の作曲家アキラ（宮川彬良）と対話を交わし、音楽談義をしながら劇場を盛り上げてゆく構成だ。まず演奏されたのは「交響曲第5番」の第1楽章。“運命”の主題が繰り返し現れる良く知られる曲だけに、ごく小さい子供も食い入るようにオーケストラを見つめていた姿が印象的だ。提示部の繰り返しこそ省略されたが、あとはきちんと演奏される“本物”のベートーヴェンを、子供たちは違和感も見せず受容していた。しかも熱気を発散しながら。

さらに、それに続く《音楽はドラマだよ》では第1主題と第2主題が絡み合う“ソナタ形式の解明”が客席を沸かせた。「宿題を忘れた生徒に先生が雷を落とす」場面（第1主題）とその「忘れん坊生徒を優しく慰める女生徒」（第2主題）という喩えが平易に子供たちを捉えたのだろう。アキラの指揮をしながら髪を逆立てる演技によっても大いに盛り上げられた。改めて考えてみると、ソナタ形式は交響曲だけでなく、ピアノやヴァイオリン、チェロなどのソナタにおいても楽曲を構成する上で非常に重要な要素である。今では学校の音楽の授業でも教えられるようになっているはずだ。それを実に卑近な例で、面白く理解できるよう誘導したことは興味深い。「相異なり対立する2つの要素が拮抗し、対立しながらも共存し、新しいものを作り出してゆく」というものの観方はまだ日本の社会では十分に定着していない。しかし、このソナタ形式に代表される芸術様式は実はヨーロッパ社会の長い歴史を貫くように流れてきた思考方式に深く結びついている。哲学の弁証法にも通じる思考方式はもちろん東洋にもなかったわけではない。世阿弥の「花伝書」など能芸論にも二項対立の中からエネルギーを引き出す記述もあり、それは現在の能に痕跡を残している。しかし、芸術様式にまで入り込んでその発展の原動力を媒介していた点でヨーロッパ音楽は重要な示唆を私たちに投げかけていると思う。その点でこの日の《音楽はドラマだよ》は興味深いだが、同時に残された課題も投げかけている。一つは第1主題と第2主題の絡み合いを「宿題云々」の卑近な例に留めず、さらに深い思考へと誘導するアフター・ケアが必要である点。その中で私たちの発想それ自体が現在の錯綜した社会の動きをも解析できる力を手にすることができるようになり、音楽に留まらず、ものを考えることが一層楽しくなると思われるからである。もう一つはこの「ソナタ形式」の解明がベートーヴェンの「第5交響曲」第1楽章の前半だけで終わってしまったこと。問題は、2つの主題は対立するだけでなく、やがてその対立の中から新しい音楽の地平を生み出して全体をより高い音楽世界へと昇華させていく。いわゆる「提示部」に続いて「展開部」、そして「再現部」へと進んでゆくが、再現部は決して初めの提示部と同じでなく、次元を高めた世界へと変わっている。それを子供たちに分かり易く説明する作業がお母さん方に託された課題でもあるといえよう。これは決して観念的な、あるいはペダンティックな話ではなく、私たちのごく日常的な発想にもかかわる問題だと思う。

今回の「こどもの楽園」の企画については上に挙げた肯定的な評価とは別に、一考を要する問題、批判点についても書かなくてはならない。まず、第1部で「青少年のための管弦楽入門」であれだけ聴衆の心をつかみながら、なぜそのエネルギーを第2部のベートーヴェンへと効果的に結び付けなかったのか？の問題。ステージの8人の奏者（アンサンブル・あんふぁん）はパーセルの主題に続いてエルガーの行進曲「威風堂々」を演奏した。ブリテンと同じイギリス曲で、よく知られる作品であることに異論はないが、8人の演奏でそれなりの面白さ（玄人好みの）は出るにしても、やはりこの手の曲では小編成による演奏の限界は避けられない。それより、ベートーヴェンの室内楽曲、例えば「7重奏曲」の“メヌエット”、あるいは「ピアノと管楽器のための5重奏曲」の緩徐

楽章など、初めて聴く人にも受け容れられ易い作品で第2部へつないだらよかったのではないかと、思う。ピアノなどでは鳥取県出身演奏者の出番を増やすチャンスにもなる。

第2部の《音楽はドラマだよ》であれだけ盛り上がった客席も率直に言って、それ以降は“ダル”に近い状態を内包しながら進んでいた。その原因はいくつか考えられる。広く知られる「エリーゼのために」を取り上げたときも、ピアノは宮川彬良が弾き、それをオーケストラが包み込む構成だった。この曲の中にあの「運命」の主題を形作るタ、タ、タ、ターンのリズムが含まれていることを実証するための演奏、という条件があったことは良く分かる。しかし、そのピアノはやはり県出身ピアニストに登場願いたかった。普段あまりにも身近に感じて弾き、聞き流している曲に新鮮な驚きを感じるためにも、である。ペレス・プラドのキューバン・リズム「マンボ NO. 5」では爽やかな熱気を放射したのだが、「エリーゼのために」などと系統的に繋がっていないため、その“熱さ”も細切れになっていた。さらに、意図が分かりながらも“空回り”を感じたのは「交響曲第2番」の第2楽章だ。私自身この第2楽章は大好きなだけに、この曲を入れたことを支持したいのだが、聴衆にとってはあまりにも“盛り沢山の料理”と感じたのではないだろうか。あまりにも美しいのだが、もう食傷気味になっている子供たちを目の前にして実に複雑な思いに陥ったのである。耳の病に冒されながらも、それ故にあまりにも美しい音楽世界へと創作を進めていったベートーヴェン（その点で言えば、「交響曲第9番二短調」の第3楽章や「弦楽4重奏曲第15番イ短調」の第3楽章が最も適合すると思う）。彼のその生き方を《つらくても泣かない》のタイトルで会場の子供たちに訴えかけようとの意図は素晴らしい。しかし、それを伝えたいばかりに、様々の面白く見せる、聞かせる工夫を上積みしているうち、反って盛り沢山の食傷気味に陥ってしまったのではないかと。

ある意味で、この日のメイン・プログラムは「交響曲第9番“合唱付き”」だろう。もちろん、演奏されたのは第4楽章の一部だけだが、地元の合唱団“きゅーびっく・コーラス”が加わって歌った。12月23日には同じ梨花ホールで第9交響曲の全曲が演奏されるが、言はばその先触れともいえる。《心を合わせれば歌になる》のタイトルで組み込まれた演目だ。フリードリヒ・シラー（1759-1805）がフランス大革命の直前、1785年に書いた『歓喜に寄せて（An die Freude）』の詩句を第4楽章に引用していることから広く知られる曲。日本では毎年、年末になると全国各地で演奏されるので、ある意味では日本人に最も深く食い込んだクラシック作品とも言える。“きゅーびっく・コーラス”がその歌唱部を慣れた明瞭なドイツ語で歌ったのが何よりうれしい。この第9交響曲が日本で年末に演奏されるようになったいきさつは、よく知られるように、戦後、経済的に極度に苦しかったオーケストラ（今でも苦しい状況は変わらないが）が楽団員の年越し費用＝“餅代”を工面するために考え出した催しだった。最後の交響曲、しかも“歓喜”を歌うコーラスで新しい年への希望を手繰り寄せようとの切々たる思い、戦争で傷ついた世界への深い反省と平和への希求など高い志も“餅代”工面の背後にあった。飽食といわれる現在、改めて考え直したい訴えかけがこの第9交響曲の年末演奏から聞こえてくるように思う。

シラーがこの『歓喜に寄せて』を書いた時期、ヨーロッパの民衆は王侯、貴族が支配し、抑圧し続ける社会を根本から変えようと動き出していた。抑圧からの自由、平和を求める民衆の闘いにシラーも連帯する意思をこの詩で表明した。この詩を引用した第9交響曲をベートーヴェンが作曲したのは1822-24年。フランス革命によって引き起こされた“変革”の波がナポレオンの敗退を機に後退してゆく時代だった。そこへやってきたのが、すべてをフランス革命の前の状態に戻そう、とする反動の嵐だった。民衆への抑圧や激しい搾取。民主的な要求や闘いへの容赦ない弾圧の中で社会は沈滞していた。そのような時期にベートーヴェンは敢えて自由を強く訴えるシラーの詩を引用した交響曲を作曲した。しかも、オーケストラにコーラスを加えるという当時としてはまさに革命的な様式の新しい交響曲に仕上げたのだ。第4楽章の構成にその経緯は端的に要約されている。激しい動機に続いてオーケストラは短く第1楽章から第3楽章までのテーマを演奏するが、その都度、打ち消しながら第4楽章の歓喜のテーマの片鱗が現れる。そのテーマ否定された後、ベートーヴェン自身が書いた詩句“おお、友よ、このような音でなくもっと喜びに満ちた音で声を合わせよう < O Freunde nicht diese Töne..... >”をバリトン（あるいはバス）が歌って呼びかけ、「人間の声」を交響曲の中へ引き込むのである。できることなら『こどもの楽園』でのコンサートでもこのバリトンの導入ソロを加えて欲しかった。鳥取県出身アーティストの中にもこのソロを歌って“きゅーびっく・コーラス”につなぐことのできる歌手は少なからずいると思う。

最も驚き、がっかりしたのは「歓喜の歌」のコーラス（冒頭部分だけだったが）が終わった時。

客席も熱烈な拍手でステージのアーティストに応えたが、アンコールとして演奏されたのは「マツケンサンバ」だった。確かに会場は沸いた。手拍子も出て熱狂的な雰囲気を作り出され、この日の催しを盛況の状態を終えることにはなった。しかし、「熱狂すればそれで万事めでたし」というわけではない。「マツケンサンバ」はそれまでベートーヴェンと向かい合い、それぞれの仕方でも考え、想いを巡らしていた聴衆の内面を解体し、別の興奮で置き換え、発散してしまったのだ。「マツケンサンバ」はある意味で宮川彬良のトレード・マークであり、多くのファンに支持されている曲であることは良くわかる。しかし、これをベートーヴェンの「歓喜の合唱」に続けることはどう考えても“ノン・センス”である。私は決してベートーヴェンを神聖視したり、クラシック音楽以外を軽視するとかいう立場に立つものではない。しかし、この日のコンサートの流れ、特に「歓喜の合唱」を“平和への希求”にとらえ、《心を合わせれば歌になる》のタイトルをつけていることを考えると、アンコールとしてはむしろ、コーラスで省略した「百万の人々よ、抱き合え、この口づけを全世界に（「全世界のこの口づけを！」と訳すこともできる）！< Seid umschlungen Millionen diesen Kuss der ganzen Welt..... >」の部分を披露する方が整合性のある結末になったのではないだろうか。この部分は「歓喜の合唱」の中でも最も美しい箇所といわれる。それを聞く感動は次のコンサート（23日の「第9交響曲」だけでなく、多様な演奏会）へとつながる聴衆を着実に増やすことになるはずだ。

『鳥取県出身アーティストによるコンサート』はこれまで様々な試みや企画を積み上げながら鳥取県アーティストの力量アップ、あるいは一人でも多くの聴衆の獲得、特に次の時代の文化土壌を担う子供とどう親密な関係を築くか、に向けて努力を重ねてきた。その試みは必ず鳥取のより豊かな文化土壌の形成に効果的に繋がってゆくと思う。同時に考えたいことは県出身アーティストの位置づけである。県内で腕を磨こうと努力を重ねている音楽家が、県外のプロフェッショナルの演奏家集団と共演する意義は大きい。力量を高めるうえで、大きな刺激となり、飛躍のきっかけとなったはずだ。今年のコンサートでは県出身アーティストを前面に出した独奏はなかった（「青少年のための管弦楽入門」では部分的にソロを受け持つ箇所はあったが）、全体の中で自分の音を確かめる作業は非常に重要な作業だ。しかし、それが力量の高い外部専門集団の中に埋没してしまったら“共演”の効果は半減する。これからは県出身アーティストが責任を負う演奏方式も考えて欲しい。企画を楽しみに満ちた内容にするため、寸劇を挟んでいる。第1部で音楽家のアキラと対話する子役、第2部でのベートーヴェン役などは、客席をステージへ結びつけるうえで大きな役割を果たしていた。その役割も外部の専門俳優が担っていた。その寸劇を地元の新劇団の俳優が引き受けることはできないだろうか？「何でも地元でやるべきだ」との閉鎖主義から言うのではない。鳥取県の演劇人と音楽家がこのような催しを舞台に、コラボレーションを試みるなどの経験を積むことは文化全体の土壌を豊かにする上で欠くことできない課題だと考える。

最後に。このような鳥取県アーティストの関連するコンサートを、鳥取市以外の市町村でもぜひ開いて欲しい。「開いても聴衆が集まらないのでは」との躊躇いを主催者が持つのも当然である。しかし、普段、テレビ以外の楽しみに接する機会があまりない地域の人々に生のコンサートを届けるなどの努力は真に地域に根ざした文化を育む第一歩である。文化に背を向けているかに見える人々こそ、真に文化を必要としている存在であり、やがてそれを担うことになる人々だと思う。あの「歓喜の歌」のメロディーをベートーヴェンは民衆が口ずさむ民謡から取材している。バッハやモーツァルトをはじめ、マーラーやブラームスなど多くの作曲家も民衆の中で育まれた音楽に彼らの創造の源泉を求めていた。日本に限らず、世界各地でも音楽や演劇など舞台芸術は今、大きな転機を迎えている。これまでの大都市の劇場やコンサート・ホール中心主義では観客や聴衆がギリ貧状態になっている。もう一度、文化を生み出す民衆の生活点、生産点と芸術活動との結合を図らなくてはならないところへきている。その点、鳥取県が実施している県出身アーティストのコンサートはある意味で新しい模索への先頭を走っているとも言えるプロジェクトである。それだけに、試行錯誤を繰り返すこと自体大きな歴史的作業であり、次の時代を切り開く展望につながる。県民を信頼してこのプロジェクトを続けて欲しい。

鳥取県総合芸術文化祭 評価委員会

委員名簿

氏 名	職 名 等	備 考
かど あき かつ じ 角 秋 勝 治	文化芸術評論家、鳥取ガス(株)文化広報室	座 長
きた お いさお 北 尾 勲	元新日本海新聞社学芸記者、歌人	副座長
うえ た じょう 植 田 丞	県立米子西高等学校非常勤講師、県立境高等学校非常勤講師	
おし もと まさ ゆき 押 本 昌 幸	河本緑石研究会事務局長、「 ^{いし} 倚子の会」代表	
こ だに ゆき ひさ 小 谷 幸 久	県立皆生養護学校高等学校教頭、鳥取県吹奏楽連盟顧問	
た なか げん よう 田 中 玄 洋	学生人材バンク代表	
はぎ はら とし ろう 萩 原 俊 郎	新日本海新聞社記者	
はま だ 浜 田 あ け み	社会保険労務士	
みなみ かわ り え 南 川 理 恵	鳥取短期大学学生	
よし の りゅう 吉 野 立	地域交流センター田園所長	

評価委員会の開催状況

区分	開催日	協 議 内 容
第 1 回	9 月 27 日	(1) 座長及び副座長の選任について (2) 第 4 回鳥取県総合芸術文化祭の評価について (3) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭の概要について (4) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭の評価の基本方針について (5) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭の定量目標について
第 2 回	10 月 26 日	(1) 評価委員会委員の実地検証事業及び執筆担当について (2) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭の定性目標・戦略について (3) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭の定量目標について (4) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭の観客アンケートについて
第 3 回	1 月 31 日	(1) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭の開催結果について (2) 事業別評価の執筆担当について (3) 事業別評価に当たっての意見交換
第 4 回	2 月 26 日	(1) 第 5 回鳥取県総合芸術文化祭評価報告書の構成について (2) 事業別評価についての意見交換 (3) 総合評価に当たっての意見交換

⇒ 第 8 回実行委員会 (3 月 2 6 日開催) において、評価結果を報告

鳥取県総合芸術文化祭評価委員会設置要綱

(目的)

第1条 鳥取県総合芸術文化祭の事業を年度ごとに見直し、点検することにより、当該事業における良質な作品創造や充実した文化芸術の公共サービスの提供及び効率的な運営方法を確立することを目的に鳥取県総合芸術文化祭実行委員会（以下「実行委員会」という。）に鳥取県総合芸術文化祭評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(委員会の任務)

第2条 委員会の任務は、次の各号に掲げる事項とする。

- (1) 評価実施に関する基本方針の決定
- (2) 評価項目の作成及び調整
- (3) 評価の取りまとめ（総合評価と提言）

(委員の任務)

第3条 委員は、作品を鑑賞・実地検証及びアンケート調査資料等に基づく評価を行う。

(組織)

第4条 委員会は、実行委員会及びその内部組織に属さない県内有識者のうちから実行委員会会長が委嘱する委員をもって構成する。

2 委員は10名以内とする。

(座長)

第5条 委員会に座長を置く。

- 2 座長は委員の中から互選する。
- 3 座長は、会務を総理し、委員会を代表する。
- 4 座長に事故あるときは、あらかじめ座長が指名する委員が、その職務を代理する。

(任期)

第6条 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

2 委員に欠員が生じた場合の後任委員の任期は、前任委員の残任期間とする。

(会議)

第7条 委員会の会議は、必要に応じ座長が招集し、その議長となる。

- 2 会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。
- 3 会議には、座長が必要があると認めたときは、委員以外の者に出席を求めることができる。
- 4 会議は、公開とする。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、実行委員会事務局において処理する。

(補則)

第9条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、座長が会長の承認を得て別に定める。

附 則

(施行期日)

この要綱は、平成16年9月28日から施行する。

(経過措置)

委員会の設立当初の委員の任期は、第6条の規定にかかわらず、平成17年3月31日までとする。

(経過措置)

平成17年度の委員会の委員の任期は第6条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。

平成19年度

第5回鳥取県総合芸術文化祭 評価報告書

平成20年3月

〒680-8570

鳥取市東町一丁目220

鳥取県総合芸術文化祭評価委員会事務局（鳥取県文化観光局文化政策課内）

電話 0857-26-7234

ファクシミリ 0857-26-8108

ホームページ <http://www.artsfriend.com/sogeisai/>